本庄
イ13
1103

113
1103
イ 13
1103
巻

# 類玉集下巻

## 戀部

恋

しきしまの道もはるかに思ひそめ糸のもつれのかなしさ　信美

いとふしてかたくり深く入る紀を頼みたるこの恋の道　典清

無きまれい恋も恋人を形つくる紀人や物すしんるまたて　完

人のことはけしきはひの海紀を尋ねて恋をうらうら　光彫

えなれて恋まいうこと紀月みのたつ秋ふるまをみまさるこん　就宮

ふしてこんてかまよひくれはいろんの紅ふ恋紀　重門

濃せく紅もいつしくもあるの恋紀八月ほとこんれは　春庭

恋はの濃のあ重れ紀のむ恋れるけは物ひと恋る人をるき　真就

大正十三年二月
花房仙次郎氏寄贈

011702039500

置く露やしくしくふにあき風の音のさやけく夜は二たよすし　景樹

三栗の中のなさけもあひ見んとおもへはわすれてねたましき　寛光

よろ人の多紀の舟を夏かけの推れる志ひて一本ふたのむなりけり　千楯

あるとかくもかく枝ふりのなけきにて及ぬ恋路やまよふらん道　雅彦

かくはかりおもはれかちにては早渡る志み衣にもそめしと思ふ　御杖

うちてわか恋の志るしはひとし紀は人のはしきの数にそありける　直道

落瀬つ淀の川のかけもまとひにあふるは恋ひとひも志ほるかな　敏彦

刀祢川の瀬々のわたりも恋すれはおもはぬ淵まても舟は志川みぬかな　好信

いはねふく岩間の水のつつくともわきかへりはしるその紙ともにかの庭　廣高（春枝）

音にのみ聞て恋しき御道をすくなき神代の昔もしらしきぞす　廣伴

## 初恋

ほのかにも言ひ出てし志らぬおもひ草ことや人をはしめなるらん　蘆庵

人のしる今は昔と言ふる恋草のいはでそやる露けからまし　美石

入そめてまた関路に杉の木の下ふみもわかかれぬ恋の山口　常久

淀にまよひて人のつくれなき恋もいのりより縁にかくもなき　直道

志のびつつかつてはやとおもひとも思ひきるるはいぬは淀みぬよりけり　春門

## 忍恋

おもひとは知り人にも志られしとおもひ人は誰をおもひそめらむ　景樹

忍ふれとおつる淀の中へまて猶ものおもひ離れ人の郷　高蔭

なかなか思ひとはすぬ秋の淀とておもふ人にもあふせしられつつ　弘訓

うらさしれその何ほとのいふ離へ人影の志のふも寄るとなき　依平

えたいもなくてもあしや男山嶺の下かきしのひのみして　安雪

[illegible]　奏庭
社をのぐれとう洲の寺こそんつむこ係ふろそむきて　歩道
寺の人生ハわろうぬ人事もかりひあをせておとろうれつ　完
互恵
いそくとて何らもむ〜んをかの焼跡ゆう〜寺の帰わうまれ　奏庭
閑　恵
おろけ城きこりゆそて人ゆそ人かりひやいつの契ち庭〜ん　長収
名すり秋人関のこまくふ姿とひ和高野の山れけんの夕風　歩入
閑寺恵
わう無ハ雪ゆの雲ふすく島の寺れこはて中こ和ハれ久れ　弓南
未見恵
それすくてたつもはは匿こねはよのんふちる庭人のありけ　学久
こねんかちくとけなてなこれとかよかりけきくあつめつ　安吉
はのうふもきここねん人生いふ又きく走る社の洲ゆるるむ　歩道

見恵
社ねるわこるる寺とる庭めてハ波のまるくもとてこるろん　竜滝
浦のあゅの引てんはうのふちるる庭むれひとをすん　長英
朔孫髪けるふ櫛のまつふもるまてそんもこるれやハ　甕宮
総見恵
美林粒りれるたくこうる界の高ちるくんをりひこそあれ　
通書恵
こをふ又ふやはたゆきこふもんつるひのそんを窓ゆう郷　大平
こゆしるもいつるふかくこうゆ姫とれをかうんを墨れふ道
彼返書恵
ふもるれてこんこれと物りかないわう郷ゆこんふ姫こられつ　美乙
不返書恵
かきゆれとれゆるひもおうりりう学のおりんこるわとまて　光熙
被書恨恵
大仏のこれとはうりのゆ法ゆこよりこるふいの恨ことを学く　級友
見書怒恵
こ庭ゆふ洲ゆるれこ渡川や学こう恵のまを庭ん紀　奏庭

歌意

かりそめもくゝせしとゝ恋しうとも浦のいそ波こゝかゝ寄れつ　安身

あの人の恋ゆゑ思ひの波わけ入て恋ゝ心ゝ乱れて恋ゝ袖ぬれ　清信

やまゝゝひまなくわけ入て袖も有はやかくいつゝ始めるゝ人　西道

あゝ人まんりのとも寄てわけるゝふんそよゝ神つ寄ゝ　専庵

寄意

さゝてゆくおもひを川の寄ゝふて板ゝ岸ゝ袖てそゝふ　寛光

ゝ川せゝらゝゝ社恋ゝたの三千も袖とあるひぬゝゝ社恋

文意

ゝゝゝゝゝゝ袋のもゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ紅

門ちゝ極ゝゝゝゝゝゝゝ恋ゝ和の枝なるまゝふあゝ袖ゝ恋ゝ邪　龍宮

岩ゝ猛の松ゝゝゝゝ紅ゝのゝゝやゝゝゝ袖ゝ根ゝゝゝゝ人　依年

ひゝゝゝゝ節ゝふ猛ゝ恋ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

名立意

ゝゝゝゝゝゝゝゝたのむ八ゝ紙契ゝゝゝゝゝ恋ゝも姫ゝ波ゝ邪　敏夏

名ゝ川あゝゝゝゝ八紙つゝ八ゝゝ八ゝ紙　安吉

今八ゝゝゝふゝゝれぬ名ゝ川ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　吳淡

意ゝ波ゝ何ゝゝ紙名のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　西道

惜人名意

紫ゝ一浪のぬゝ袖ゝ波ゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　正明

ゝ人きゝゝ後ゝゝ恋ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ人　吳淡

折意

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　紬子

実船川いゝゝゝ道ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　重門

きゝゝ川人のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　左舎　真邦

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　儀旦

ゆくさきをれうけてうひをれ中ゑ〜ふなをあたふせよいのるこゝろをと　垂迹
をせしのみをれを神のうけぬる遊興ありやと祈行る客　寒庭

**彩佛哀**
蓮華ふの上社祈うひまあ〜ねをゆるとゆさむく社の志う秀　寒海
**彩久哀**
行かよの岩船のおく社板村も牧志るもう日牧〜ふりう　忠女
**行不遇哀**
あ〜ゆ紙神よ佛ふいのう一ゆもう何せのひそう三藤の板村　正明
**不逢哀**
わうとく姫うハあをぬおりひせてむう〜ふあと人のりひけん　安吉
久よ神のるあゆとゆ社ゆ紙も我世まつそゆけくころ和　たせゑ
**見不逢哀**
ようれもう紙中川のあ社栗神のゆぬまて牧そ牧うく　寒庭
**則不逢哀**
志中あ時八十の浪路をたつぬゆるあはう紙るゆよある　寒海
**校ゆゆ**　朝夕ゆみまあをゆうゆもうゆもき彩のつよゆ　寒門

**孤達哀**
日紙經てはよふいうふゆ見きゆ牧ゆよゆうぬゆ人社御布　寒光
**契哀**
あゆとハかゆの〜御野の天川ゆ一和ゆもう〜母生ゆ　喜海
わゆゆれをてわゆの川ゆう紙ふゆよ志ゆまゆゆそゆこゆん　安吉
契おくゆの彩志まゆうてかゆ〜ぬ人のゆ御紙も見ん　寒庭
**初契哀**
哀哀中ゆ雲ふゆれぬゆ中ハゆを浜契ゆう〜彩ゆうゆ　貴乙
**無ふ未哀**
ふけゆけハ猫のゆうゆと歌ゆう契ゆ臣紙青社ゆ〜ゆき　為接西
**待哀**
ゆ春ゆ〜ゆ川哀ふかゆゆ〜ゆ本ゆゆうけふゆ下ゆせゆ〜ゆ　吉仲
ゆ紙のゆゆまゆ〜ゆ彩ゆゆゆ志〜ぬゆゆう紙人ゆ〜ゆやハ　寒門
月ゆ人のわゆゆつゆうハ滅ゆゆ〜ふゆたのゆぬうみゆゆゆゆゆ神ゆ彩　敏宗
ゆぬ人ゆゆふゆうゆて夕月社ゆ御ゆつゆゆゆのゆゆあゆゆれ法〜　重門

通れ待恋

暮ふくてたのめハなしる夜をりに来れも人をや今ハ待さまし　寿庭

来るしめやすらかに萩原のうへしあらぬおもひやりをと　清峰

さりともとまた紀し月数の待ま多くもなの年月てすつる年の暮　建正

忘ゆ人と待をハとしふ数かさねて秋さへ入れぬ夜のとゆひのしるし　亜入

さらぬまの鶴やまちしとこの外に立ゆそみぬるれぞ悲しき　宣周

久待恋

いさつゝに老ぬるかなるくる人をまちとにぎりし松ヶ枝を世に手折　能居

稀待恋

待さへつくるの秋もまつる紀年の心のなかに野分の風　種彦

待空恋

待ち明けば人まちいひし夜も我をそこにきつゝ来るやうけあれ　亮光

夜すこしとハ宿りの松の月かけぞ雨になりてもとハぬ宿　多伴

雪雨待恋

ぬきつゝも悲しくて来まぬ宵毎のうちも待ぬをうき身也　寛誠

稀縁逢絶恋

こんとおもひてたのめしるよもすがらぬる枕もまつしとふかの夜　依平

来不逢恋

とひゆくんよその夕よりに来てかねて契たる人さえ夜もうし　幸之

衣手ふかくりしよひのかひもなく忘人まちさしかふの袖　方朗

上通夜恋

今さんとおもひし契ハたゞ人様と目ばかりもうるそくるる事あかき　種彦

かくハかりなるる情ぞいりとふう今宵てつれなきかりけん　景樹

逢恋

命やは何ぞと思ふにおもひハまよひを来るぬ心あるかな　依平

うれしき袖つゝむ涙とこよひ来て洞の浦にも待やのとりし　安守

来ぬやなしくふよわき袖さえふなりおへかなハと恨あるらに　寿门

逢見しのんれとりふ其の袖のたえぬもさむき軒の秋の露　直里

私逢恋

あふ川の手行ハて世を秋ハ逢坂の名をたのこくしうへやあるらむ　とハ子

こひしてもむすふ契の和泉路行もしられぬ枕にそあらん　春庭
新枕さしもや?めてさそふらん又その川のよしなきねなきん　直道
あなたは中の?くそのさよ衣稀にしや誰まちかへすらむ　英?
うたゝねやおもかけをたにはかな夢もうちとけぬ下ひもの實　種?

無実恋

かゝりても芦の根のうちとけぬをしれはかなもはかなきりけり　依平

別恋

あはれにもその朝はいかなしき袖そも別路はけさわかれ路　直望
ことわりの秋よりさきにわかれてもわかれの道しはの?そ　澄夫
今はとて契おくにもきえぬ?わかれやつひのうちにしも?あ　美濃子
むつましく契りしふるねをしもかゝ?わかるゝ暁やあかつき　無門
出ぬ霜の猶をきそかたれ?をも?のわかるゝ　茂雄

後朝恋

うちとけし霜の袂に月落て?にしもむすひしあかつきのかたち　景樹
きぬ〳〵の涙の露の袖のうへにはかなけれあり?けの月かな　戒言
むすひおきし?のひとけよと?の涙かきかけきその玉つさ　春門
あひみしは夢ともなくて移香の袖にあかぬわかれのそら　大平
わかれてし今朝の袂にけさの枕の露もいつしかそ　空門
うれしとも今朝のわかれを消かへるひるまも?きねの袂の?　春庭
わかれ路はうらみそ出しき?もきはりてはかなきわかれ　戒言
まても又?らもみしくの?しかはてうたる袂の?きたれて　常久

怖無恋

逢ふしや蓑にも?きたみては今朝のうつそうつゝ?　敏夏

逢不遇恋

新たえし実の清水に袖ぬれてうきしとおもひし逢坂の山　諸?

立帰りくるとえかくれね坂ハ関の旅人やあつれたまりもん　英石

稀恋　稀しやひ川手まれかゝるみの難鳥なうすく盛ぬる枕半ば枕　直道

謡恋　ふをわけしその夜くのうれしかしいにとよひを恋の小夜きくへの宿　廣住

かくらしとわすふんのそこさへあひを旅よりくうち出られ法　とん子

志るせまやかく后契も有ふのとわり思のうへ紙はよりはして　武岳

別恋　うらもうらく来とぬる中の恋衣つまとひかへる人へとうめし　依平

疑恋　はてくもかこいうらふたの手紙をかはしてはしらふ乃れら貿　岸 千治

大舟のおもひたの気といひハ其ともや紙の浮世のうけかさの世や　大平

互疑恋　偽をかくもの杜の那しめ継かすことなくふかく旅あやしきを　英石

鵆恋　きくまふもからあらうて鵆ハあらてたのすんあくまあるはし　直道

怨恋　偽をかくとも我やうれ人ははつられまま旅と絡ろまらん　安子

年月ふ人のつくさる恋恋も数々を法さんよわりやさま旅　廣住

恩恋　おもひのそは恋もほのをうれ散ふけぬよと夢のまの乃枕もせて　有房

片思恋　思ふをハおのふのかくすも粉ハ数をわの穴くのハおのさくのなり　溝口 謀

切恋　夢の庭れひるハ涛つくすらハおきてかけぬ人をうけて恋法く　有信

専恋　きえはたくいともあくらのさく数をて思ひとかく沙ものり賀　野渕 良

我すくぬ人もしんをかくし只身すくふ心とわのひまく底き　光彪

和詞恋　つくりしきのわかなることもふりけとあつらく余とどれ　楢房

厭恋　恋くるるんよその嫺の末も多ほ月ふうともちて人やいとまらん

大雪のいとはなく身にいるまれたえを洵の雨と婦へらん　茂房

然而 敏長
いとうるみとうれ秋の桔梗ふうろもかそこうて

憂恋 寛光
かくんとやてくれうかきの涉猟おきくふ所のかさへ侍

感秋恨 春庭
さうと志しぬ人のふれ秋の色紙袋ようをてあそをうしろ人

悔恋 雅泉長
七月のある花の日数もちくに匿てうしろ人のふうりもう

恋恋 美乙
山の井ちふとうゆくんとうも志くてもむもとをしてとを年に

直遠
うれ意よくゆむんのはくやれうれをてねわの身ちくむ

三野
ちろひとし人の金紙るけくまふわをくに流ゆをてまつきえ数き

寺匡
やうくきとめとうはせ人の見ふうわをんぬ袖ふくに流ゆを大匡

雅泉
志華かくんまいおくをうはをうれ人をり樣をおもくや

美乙
繋つるとの行巳紙をうとうと人のとくに紙を数れとるる乗

紅志恋 弘訓
金紙もうやちろひをおりぬ数ふ身をとうゆ人のわをれ

恨恋 雅法
色かをに流秋をふあくと志の人華ふうれねをうれ人をる数をて

直遠
遠新あくしいつれをうやんくみ逆きくふいるの雪をの遠路

正明
雪ふわをこうるおるひの雪をるくは跡つくをうり恨をそくをる

清晴
う流ゆるれあをくの流ふとくむふゆ秋は美袖をるるれ

春庭
三色をふおのひあをりてちくを雪袖ふ玉をく蔦ねくに風

五恨恋 俊和
蔦をのくくあ恨むを秋うを八たう神をうう五をくゆの乃人

子匡
おのひきやもむをふ数のをてもをくあ匡んをくくむくくと

人侍恨恋 敏長
ちろつうをつくくるくのいうるくむ数ふいひいきをくを数

美乙
涙をいをねひも匡人侍ふくうくををとをて流のあうををとう

萩絶恋　大手
琴　恋　寿門
ことのねにかけるかきりのかなしさも琴をもてあそぶ人
はなき琴とかなしみ中しも琴をもてあそぶ人
なくなるの和琴　依平
絶久恋　光清
年もへぬとしぬ掛をあらす蜘蛛の糸
あひきとも云ふ　寿庭
五瀬　結恋　寛光
絶後　待恋　寛光
絶久　恋恋　寛光
四　恋　寛光
わが恋ふるの神社神さびて年ふるしるしなきかな　級夏

屋敷　田女恋　永章
寄恋　両人　寿庭
わとおいぬ人もちの世の面うけハあしとおもひしかしもる
ふるさとの野にまくるつち石ハさしめても牧さしあう稲つ
ちにあんなりの赤も二方ふるひとりしてこの世よりこんな
いそんなりの人の人の紙さしむきあひの重ねわく方もは
花紙とひ見とたつ所る外ふるめ紙ほとに方もいろ
こころかくふあされを初しる人ひとりのきかくるの赤ふる
おもひるそのかるくもこつまひふれるの紙ふけ思ひたは
ふるさかるふるしれさこそなの色ふこひわさこんとあるひ人ひけきや
をたれうけもこ後とかるたをもものかるもるる琴弾のこもるれて
恋恋の人彩その家もそもるこふと頼ゆふ流んふすきや
三人　恋　光彦
妹　恋　久里
不及　恋　敏夏
恋隠女　依平
安吉

悪女人　諸人
悪職女　とハ玉
嘉東　西八　廣広
石船　栖意　侯和
石言　立不意　毒庭
玄位　不表　猛廣
迎意　毒門
遠意　依平

隅意　毒庭
隅意　常久
鳴意　掠陸
船中意　紙広
行路意　宣風
馬上意　方朗
宮門　不入意　重門
石橋　つ意　定光
市意　石舗

白雲のかゝる山路を尋ねてもたゞ人ハ知らぬ山ぢなりけり
おりけるも知らぬ人ぞなりにしよ知るしるしハ志ぞしるべ
知るしるの用ゐ侯をいハおもひ出よひとりの浦のねさめを
いまさらハ市の堰路を吹ゝ世のたゝりまれるゝ人ゝ紙
船浦浦ひきゝ入るる山紙ゝ尋ねうこそ神の舟人ゝゆやこゝ人
かゝるうゝ侯人や船に寄の沖ら人妹ゝたゝゝ行なつむる廣
玉琴の志ゝ人ゝ侯ゝ紙を寄ゝ何よひゝれと船ゝ侯ゝ人
われ人中神ゝ行ゝ車のかゝたゝゝ引やいゝ
老らゝ行ゝ和ゝ人やたゝゝ行ゝ人ゝ門させゝ
身紙ゝ人ゝ侯ゝ行ゝ人ゝ侯ゝ紙ゝ市路ゝ寄ゝ侯ゝ

同所 恵
緑 恵
精進 名恵
艶女 恵他人
老 恵
知 恵

専門 安吉
又人をとけきもたりしかんむをひかく枕の草とうみまて
春源きいはのの庭もてるみも風吹てふちりぬへきうれ 覚光
恵夜をみてけさしのうちはふ遊行もすり名残をする 久呈
あさ人のふれうハの今なきハさことかをふるゆりゆ〻まり 依平
老の身をおいぬんをあきしもおりの人の歌ハれ人さうをう 方朗
老ぬとて人のはしをふ和をうし志與神の湯ありけを 房信
うし紙をう嘉き筋をる紙我かも野せ紙をつ神の瀧つを 寛光
いとみを紙をも今をうわうあ人れをう人ふをしへおうすし 慶伸
をうりたりん歩紙たのをとう袖をふすを打とみぬるて紙を 雅孝

恵紫 同坊
恵波 世坊
恵地 藤媒
恵 夕
恵 夜
恵 書
恵 命
恵 滅

ををををとおりしゆ〻くれをうを今ゆわうを紙をけきをり名 専門
あはあをう豊も紫もとをふきゆるふうを社恵の中をう邪 定光
絶をゆ〻道をを海をけをあひをる志をを選ひる恵をやつくをも 長秋
つをををを〻ものをう〻をうををハをけぬ我命をる 敏重
いふせんをるれ物の中をけきを色をはをるゆ人を〻を
中をれをを紙をふ深をおをうをを我身のをを所あき 久乙 下里
をうをを紙の風を藤をもおをうをふをもよハ紙を紙 延平
をを書をわををしわをれの紙をを又ゆをを人をのをけをの面をを 常久
をを命ををををををををををを命ををを紙をを恵ををををを 専門
秋の野の中草をを人を恵神の恵ハををををを恵ハををを 寵滅

夜雪
よひ／＼に宮守いまもおのれか間ぬる狐火のかけゆゑのかくれ家　安方

夜雨新
よ假中さる春とのことも我ひしかた風清の葉もありけり　亜遊

夜雨歌
うちまうし雨新らしきものとう濡見しよの夏と何子声のまん　春庭

いつとなしひえてはるれなとて宿のこれやうつる人の面かけ　安方

夜声
春か後らふきくしよひう新玉きんの打ゆるされぬ夜論するかな　三升子

夜閑
おしねらうあのの紙しかもこえなやと朝ひきうるかなるやの雲　長枚

春夜
思ひおくり吹も色かはれとあてわかよ清てよそもれ春風　表邦

梅花ちりれも桜をかくふてたえ深よひ人風ん声の花や　依平

春山の男さひしく妓の花かさん清しき人ともそ登るあ　真鍬

はるよしゆかれのむかう春雲花のたよりに立やよふとて　笑石

柱紙のくれ屋しらておけるさ我やの春風をさとのすさまし　安方

ありけれまる時やいつ人に猫おもしろくさゆ春もえれた紀　尚規

夏夜
中川に来ぬ新子かしこ明るの月も我身も中宿にして　晃徳

大かさいくすゆしくや色に浪し夜や夢の庭月も夏のよひに

青柳のみ子声めるもの流れ宿のなかくもよのそよ吹るわらる夜　秀尚

いかなるへおもしろもえぬ宿紙たくくみ鶴いあをれさそ紀　亜遊

人と絵の川のかゝりあれても声しぬ遊暇ゆえわか風々子　春庭

秋夜
ゑれもてしりて新契も秋萩の古枝の花声のふし絵の那　清鳴

音ふるそくあらぬいろそ妻恋のなくらにおとるわらおもひいは　秀尚

書さらく小田のるるてのあそそてく人まひられ人のみ身とめるらし　西則

冬哥

あれもこほりぬりのゝ今よるはさひしやまもなくこそありけり　とい子

はつ霜や浅茅の末に置きしむすひてあるにそきちりけり　常之

根こそひ鉄の水かゝりてむすとそぬゆゑ紙そゝ川影守る　廣伴

朝氷の消えをかたみに出て見し流るさ志ろ紅葉の楫棹　英乙

歳暮恋

年も暮れもとし来ともゝ今は逢ひぬとも思ひたる心してつみてえと　敏安

寄天恋

如何のみに我中見は神代へても紅の絶えん天雲ら紀よ　安も

天雲れもゝ今もうつりふ高れをおもひさうくけ手をまは爾　衛枝

寄月恋

ありけることを世にもそへのわきさかし手れし出ては月か光に　恵道

うえもせんゝの世ん今をよひく心雲と入月の光ともみ那　為任

村雲れ絶ゆ紙もそく月されやまもてもう川る人の人を　とい子

今よりまてはとは雲井の月ゝり夷やむつみ神にさと心を寄　寿庭

とも心ふれを今はよ世る依つま紫を今香は見に誰かひくらむ　寛波

かつら紀や藤の里に来紙ても住ふのみゆるち孫の志らき　稲彦

とゆきれはうちあられゆらぬ今とや何ゆゑも世のれえも　尚翅

寄雲恋

世れもをてゝ絶ゑん契とも志らて嵐になひくえうなを　寿庭

あけぬとて世に目られて行雲の使へふう為す契らかうき　長英

寄霞恋

うれ今もあをれとこ後しあめえの媚よ春のかすとありせは　常之

寄風恋

のえりこん根と雲井のいさえと咲ふかよへ給の松の風　最

寄雨恋

隙あをかつまにすしてこ夜今以何そり志らくはあるく雪かな　常雄

雨ふる物とも志らて今りゆく雲とられしく待をそらし　寿庭

霧時　四首

霧象　恵門

霧雪　寶庫

霧霰　恵道

霧氷　美濃守

霧烟　大平

霧山　恵道

霧松　寶庫

霧杜　愛先

霧霞　恵道

霧霧　白郷

霧烟　美濃

霧山　慈女

霧松　恵道

霧杜　寶庫

霧霞　廣端

霧霧　美乙

霧氷　恵道

霧烟　寶庫

霧山　白楠

寄示恵　今はとてとゝまるべくもあらぬ身の心ぼそさ　寿庭
寄岡恵　あくがれの岡の草ねをたづねわけてもとゝまらぬ心　成足
寄野恵　かよひぢの野の草ばかりなつかしみ人の志をしたふ　遠道
寄関恵　関の音をたよりにかよふ人もなし　猛春
わきのあふあふさかの関の戸をたゝくにあけぬ　慶仙
寄橋恵　橋ぬしの心ぶかさをしるべにて　乳房
橋ぬしのなさけにかよふ人もなし　寿庭
人のわたりをまちかねてなく　所枝
波の浦の波のわたりをまちかねてなく　当出
木曽川にかけわたせる橋ぬしの人をまちかねてなく　紙屋

と見れば人のとゝまるべくもあらぬ舟橋　多枝子
寄小恵　和歌の浦の清らかなる磯の根にとゝまるべくもあらぬ舟の心ぼそさ　寿庭
寄河恵　あかつきの月の川波はまだ暗きに長谷の里人　能
演名川と記せれども未だわたりてもとゝまらぬ心ぼそさ　尚規
中川流れるとまぶかに川おもてにあらぬ舟のとゝまらぬ　常久
寄海恵　独釣舟をたづねて海の浦や外山の波にとゝまらぬ心ぼそさ　亜遊
寄演恵　人のとゝまらぬ演の舟もとゝまるべくもあらぬ舟　磯足
我をとゝまるべくもあらぬ波よりそゝ人の指ひとつあらぬ　大平
寄池恵　なぎの池恵と知るべくもあらぬ池の流れに　寿庭
底深きの紙いとゝ志しるべくもあらぬ舟の池　当匡

宮田色　紀の國のむろの里とせかりそめのくさまくらかけ[illegible]　実光

宮木色　いはの川おりくらす袖ぬれぬれもかはらぬ袖のしをれ　寒庵

宮紅葉色　あの東ふもはさるあのひの数くをあらてそんの袖ぬれる　亜道

宮花色　あもれとうあのひの春ふ花まうくかう霜をとの為君ゆる

いろはせん年ふまれるる人ととはのこし菊のみうせそ　重門

宮黄色　毛こ神ゆる枝よ風をうら紅人の色上何ゆ中りかとこん　尚規

宮黄葉色　滝のこまうくうの川よ袖ぬまてとくれぬ袖とおくこころゆる

花ゆても秋ゆる紅ときの数のこまおりひそいつ庭の白菜　亜道

時ゆ袖庭の高誉まう紅人の秋ゆそ紅ゆるう那　依平

宮華色　秋より人の人の秋ゆ乗ふ花はゆうりと科華をおひそふ　重門

宮紅色　菜ゆ名のうつまてつくくかなのこみえてへ法るもゆ紅うあるも　寒庵

宮黄色　あるまものくくはんの花くくみわう君ゆくくかつ袖むくも　要門

宮藤色　我色の色重の一重れ山吹ゆいはぬ色れゆる春ゆ法ゆ　猛夜

宮菊色　あへひ華天つ日うみの手かくふゆひく紙妹ゆんとうう那　弓体

宮菖色　手姫ゆとみくれゆくけゆわゆ菊ゆ庭の菖のたくひゆうりる　南枝

宮熟瓜色　春ふう紅ゆゆちの瓜をたゆゆれゆるゆう人ゆ紅ゆのはこゆ春へ　寒庵

宮藤色　潮くくゆる生ゆゆう上のみくれゆの又行くくふなひきけゆふう那　景樹

宮油松色　かりえゆもうひゆる紅ゆのふあゆ庭ゆ紙いゆうゆの油のくくはゆゆゆゆう　永章

宮竹色　庭の面ゆいくく村竹いくくゆふくくこゆ書こゆ稀くれくうゆれ　寒庵

ちよ竹のくよわさの音こりまて涸の露ふらつるひき浮く　其庭

寄葦恋

難波かた何かる人のうらみにふ入江の芦のようれそめけん　寄補

寄夢恋

いつまてうつれなかりしんのの火ことら夢をも思ふはありし紙　弓尚

来しみ八物りも香とありてもふ君のあさり紙とひてくらし花　甕法

寄雁恋

人出さぬわりひハ常ふ山路のかふ鳴つて世をも経るら那　子別

寄鷹恋

孫子多紀てうちのやふもたとる物子芦への方ら其思ひさらてまり　琥法

鵙八をらふ多ろまてら鷹のすら孫子恋をとて今れころろれ　亜道

寄鷲恋

そりはてらよそふ多の好る整ま八鷹の物き恋のわさなふもあし　行杖

いとり舟入る入江ふら鷲もひとりハえとそ待ら好見ぬ　文多

寄虎恋

今為虎のかうまたえぬ生つて紙うよあ変する人中をせぬや

寄おもひ恋

ぬきる糸つ絵てわすひのある中もけりて鳴つや我わすられまし　亜道

寄虫恋

御馬草ふ根しきつ絵もれむし秋の声よ宿と数まり庵那　甕法

まのれさく那古や日くらしてくれるハとひてわかれし人なきくかね　春庭

よ我よれきてつけしの身の秋と声らてきうつきかくちかま　旅平

花里の露ふなき虫く虫れ名もとてふときけん姫しかりなり　吉隆

寄蛙恋

とよひまさはきてかへる我声代を那くいつまてつ絵中川のうり　景樹

寄獣恋

波をへらかのいる矢ふむつ八いうり猪の入りらうれぬ恋の道ふ那　亜道

ほのふふハわするく夢のけしさへや山中とよむ鹿もありなれ　其庭

わきん草かりてやうひ我の鶉よ波寄せてなまも人のとひとぬ　安弓

妹かりしよ伸く鶉あすそ紀を追てもちよるほとも小萩や来すらん

雪鶴図　遠近も雪にはなるるもうれしき月の光ふきそはせとま　大年

雪鹿図　雪の山ときくにたがふ秋のさまを　三世女

雪貝図　ちとり鳴こゑとなこそ浜なるよりの貝とはてしてこのこゑ聚まるらむ　景樹

雪石図　引ぬとなるあまの石もあるあをはゆるあの人のこゑ絶何時かり　み圃

雪玉図　雪ふるあるあ海藻をあつめしは緒をつぬきてこそもきしあと　宣風

雪蝶図　めぐりあひ中のかくれとみるもしらいさふ月のる続い　親持

雪蝶図　むらひつくこもとおもひ紙まぬ流るみいろくふうるる人のんそ　公補

うれ無ふ雪ゆくあをいるれとかむる続のうけもこそ　甕海

いつかり社雪ふるまも雪画のこと社後となのむる雪やまらぬ　常久

うれ人をきくこのあひの雪むうりんうるゆ雪ふるまかる　直道

雪の笹図　雪のたまきかて月のおのうふやかくもとをも　美乙

笹竹のおのうふ雪ゆけてひとり秋をとをいをみ　房信

雪琴図　松風のかをたのむ雪くとよとをふも雪ゆやとをれはや琴　遠世

はや琴をもうれの端より雪くふいわるもれ世と人のきかは　美乙

いるふせんたえをいひる琴社をてきけるうけもひうねを　常久

とをかふんひうるくう紙人のかきたをてこ琴音はまるせる　茂無

あるくふ雪紙もう社をの秋のもこ風まふ雪くをてしかる　俊和

れをひあるを極の雪くてかきあのあるをくうとくくやきくらん　安吉

雪の高かをもむくの庭きり社ありとかきけとはは風まは　慶信

何しうるるしくるるをて雪社と秋風　安吉

雲子意　一筋よあゝ知人のうさゆるゝ雲子かな　龍古

雲矢意　かつゝ紙のそつ袁まき引まとつよれたる紙入のうひも結　舟絵

雲蔭意　名ゆゝまつて今ゝあるさちれ四まきつゝれなる中をわるまき　多引

雲桂意　智ひいるん紙余志ゝ結たんゆかゝめ結るゝもおゝきも　猛蔵

雲蔭意　たりかとあり知ゝ矢のありのせて出ふ意たかゝたつゝ紙名郎　春門

雲蔭意　志ゝくゝもゝ余ゝたひまふ知ゝ紙かゝ結おゝたゝひやゝれなゝ　常久

雲桂意　もゝ紙けゝゝたゝふみゝて滅のゝはゝおゝくゝか結ゝまゝゝれゝる　春庭

雲姫意　みて智ゝふ姫ゝ紙ゝ知ゝ中ゝゝ紙取るゝかゝふゝ紙ゝ知ゝ

雲蔭意　今ゝゝゝ知ゝ知ゝ紙の風はゝりゝかゝゝもはゝるゝまゝゝ紙ゝまゝゝ

雲姫意　はゝゝゝも涙のゝはゝゝゝ結ゝかゝゝゝゝゝゝひゝゝ知ゝ　春庭

雲麻意　うけとれゝゝ舟ゝ雲ゝふゝゝゝゝゝゝ知ゝ紙ゝ知ゝ　八世五

雲笠意　いゝゝたひゝかゝけゝゝもゝゝゝ人ゝゝゝみゝふゝみゝゝゝゝゝゝひ　春門

雲麻意　雲笠意のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　方作

雲笠意　ゝ知ゝ神の市ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　環滅

雲泣意　祈きゝゝ紙きゝゝ知ゝ中ゝ紙の雲ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　寛光

雲女孫意　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　市枝

雲綱意　相ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　

雲子意　いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　演呂

雲衣意　一筋ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　春庭

雲衣意　ゝ人のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　春門

おのへあるえんぎ人ぬふくてたねの新宮まゆのこ絵ものがたり　雅彦

時〻ふるつむ和の浦かゝ衣袖ゝかふれつ君のこゝろ　たせみ

世紀あ人ぬ洞のそてふれありなハ恋禁のきぬの君ゝ人ゝ　依平

ゝつぬる和あゆゝふれ美ふゝ風ゆゝ麻のゝ衣　松本　繁樹

かゝみゝうけとありぬゝ伊れ和ゆ幸ゝゝふゆゝ君ゝれゝ　直道

百紀の大宮人のいゝ紀ゆひ打とけかゝ紀ゝをこひ法ゝ　佐義　枝彦

山川ふゝ世の布のあゝゝ色ハ変ゆゝゝ返我人ゝ　真門

寺ゝ紀時ゝ庵袖ゝくゆふのとかふゝ人のゝゝまちゝも　作枝

ゝれゝるてゝゝふゝゝ紀を琴の稼洞ゝきゆ庵ゝを女ゝ浦舟　尚紀

源のゝ人ゝ庵ゝ庵ゝゝ紀ゝ舟のゝ紀ゝ人わゝゝゝゝかゝ　真嗣

同速の浦ゝ舟のいゝ紀ゝゝひゆ和をひゝ法ゝを　雅彦

ゝゝふ文引やたゝふゝ小車れゝしゝ恋ゝゆゝゝ紀ゝふ　

小和ゝゝゝゝ車の青きけゝゝゝの袖ゆゝをかゝゝゝ那　甕彦

いゝゝゝゝゝゝゝゝふ何ゝゝゝ人物自車のひゝれいゝゆん　英門

ゝゝゝゝ我ゝゝひゝゝそゆゝ入まゝれゝゝ五の国ゝゝゝゝはゝゝふ

雨ゝゝゝハゝきゝ志ゝゝゝ炭ゝ衣のゝをみゆゝゝ紀ゝ恋ゝゝ袖ゝ　潔夫

ちゝゝゝゝ人何ゝ志ゝ人洞ゝゝとゝゝゆん人ゆゝつゝゆゝきゝゝ　甕彦

ゝゝかけてゝゝふゝゆゝ社ゝゝゝれゝり何ゝ洞の玉社をふゆん　雅彦

今ゝゝゝとゝんぬ庵を打ゝゝゝ人ゝ法けゝ我身やゝゝゝと消ゝん　元浦

ゝゝゝゝ紀ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ寺ゝゝゝゝ返ゝ我ハゝゝゝ那　行牧

寄都恋　玉しきの平の都ことかくにうつる車まきわらてし済かぬ那　奥門

寄名所恋　逢坂ておりとはいへるか安川の中ほしも妹よはひ渡るか　龍官

名底にも流れありせはまつ河恋そつきたる身も沈めまし　専门

世の海の波かおきてはふし祢の嫺とつひに立けりるむ　猫彦

寄商人恋　恋衣うるみても我商人の身におひてもやつまきかゝるも　甕法

身におもしかけておもふしとはされと我の衣れきは恥しなれ　秋風

寄伊勢物語恋　つゝゐつゝゐつにかけてくらへこんおもひのたけもいつまたくきや　奥庭

寄源氏物語恋　ゆかりまて身にしむ色か流にも姉ち思ひ知らぬ契とそ思ふ　美濃子

たまにかへかけて忘れさんまかつてはおくき道まれくるも　廣伴

ゆく今を平にかけてすへからひまおのる恋ひとめえや渡らるむ　廣伴

寄朝顔恋　上紐ハ中し人のこゝ結ぶ那ら上へる神か口舎やせし　甕法

古帳録條宗顕那しにてしを床致とも　うらむるも中しられしおかのまヒハ大かことにてもやらぬへきこ紙　奥门

いひおもぬ　んきれ世人の草葉みえ恋ひにしふかくある物を人のはかられハ　美名

こと人をおもふ　ぬらしても我にあるまじぬ紐のこへさりやらつまとぞひとかよふ　甕法

ひとりね　あなや変わられやうつたまほしきてうれさえん曉れしと　廣伴

いそつしふふきおれかるもかくおもふ恋世中ハたえぬへきうれ　廣伴

一れつかそる　わすれしぬ人のこゝ能の名たは紙いかにせよとの契そとつふ也　奥门

二たひそる　今さんとちひて二つはに契にかりみよいつまり人のこゝ結を　甕法

かへそる　ことれこへと我のまとりしかをせとあかハさぬよそれよ我そうき　廣官

やさしさにそのみさへねむりおちていつはりのへきを世にのこさせも　妻門

ほころぶる　うれ人やよそにふくの娘かき草咲てちれかゝる音信もせぬ　淳流

むかしかし花一花二花の花人にしは今はよしとも聞きぬへきか哉　雲光

ちらして あきを　夕かけかおもはぬ方にあるひきつゝみあかひる紅ちり花道の哉　続六居

ふたたびの　わかはなよ無の山路におのれさへ娘かたる人ほつるひとまくらも　久呈

おもかさ娘かたる人ほ志ろ人ふそくおもかぬ道も雅やおもうさん　方朗

わをは　七車のさぬとひゝし花それわたる萬紙のれるあふのかり　琥法

むし見る人　よし見へおもふはあし雅しかしもみし我今もわかれさかり　廣伴

口かくるむ　人ありし次を角ハ千すてん池ある花そことはつるふいひあかりし哉

人はま　いかなるは酒のそらの橋のよそは花世のひの身ふハ志ひらん　公輔

くれと あそね　何にきえる引の石もさすしふくれとあひきぬ中にあるも　方朗

まゝ次　きえる名もわら名も今ならうまなき世中ふひとる所ちらん　廣伴

わきまへ名　世の中ふあつる名もおよそうるぬのならふひやはてよ所のらん　京樹

次るふあう娘根花花もさぬふあるおきさ名にゝそそるかえ　言付

おもひつる　よそふのそみるをそはるの紀のさはさるひとり空ひのかな敬を　妻門

まちわびつゝ姉

おもはぬおけぬはま戸ハ秋るしね消ふん花さしかなしむらん

恋のひてなく

世ふのかん名をつきしみなら人ふへおよふるきをおよ所道ぬる　光影

人のゆくへはさらしの床

うつゝにハさしもかくさむ人志らぬ夢路ハゆるせあふさかの関　廣伴

いまはれてかりける人のもとへ

人ことは秋まつ草むら吹風にひとやなきのとやハきく　言伴

君ふより我身ハおとろ志の夜ハつらきも見しかはなれ　約子

いひよるていとふかりける人に

山川にさしはゆる世ハわたれやいとつらきにまつ打いかゝせむ　甕波

人にみせりけるふみを取かへし返しをかくせられて

忠しくふかくそたのむ紙屋川かきの名のあとしみえ緑そ　廣伴

よそにしはかりける女にまかりたりけるを

薄しくわかれしけれ涙にぬれたちは人をとかむ　方朗

名立よありける後はてふかきはやと人のいひ花を

わか浪のたつ浅瀬よ舟でもはあかれぬにきて涙をかん　為楯

世おもしろくありけるひとのいきけれとうちとてへてもみえさりけるを

君行の一歌ふて親ハさたかしハおれいつまてはらぬ恨しきとまらん　完

人にもおしくて播ね居てありにける人に

みちひとの堀ねきにくらきむ縁のうれたのうちすくせられ　廣伴

おいひけるの人のもとにおもひ人せましとさとしれて

婦たさそうれ紙つらて行末の人の上さへ人そおしかりけり

男女の恋ききて秋過くある後てえもとひて人にえあたらぬに

かくし衣きてゐるつにかへてあやしくみをたにも人にいとゆえて　ともあ

夜入けて人のきこえぬ所ふしみ合けるこゝろをしてみつゝ

遠芝は秀ほとわけぬ袖ふしもぬるれぬるを秋ふかしと有ける　完

義ふ人のみえしこゝは

義ふこゝろ形くさめとやみえつゝむしめて中しゝ屋紀ぬと　方朝

紫式紙きゝて女社家は男来こゝ

紫社家なつゝくきこゝ屋くきこゝ屋ひこゝろふよりて歌なり　完

四月一日女社のこゝ

ぬきこゝ女少やそこゝも義衣こゝ屋きゝ人のこゝ紙なりけり　古道

志のひてものゝ人社はこゝ紙を形

きこゝとこゝ形こゝ郭公いこゝ郭公いこゝ形こゝ人のこゝ　俊平

女の家ふ男ふこゝ屋ふ社のこゝ

人こゝ屋ふ社ふこゝ屋ふこゝ屋ふ社ふ家はわこゝ来ふけり　聖法

女の家は男来こゝ屋ふ男来こゝ屋ふこゝ

かゝふこゝ社ふ社ふこゝ屋ふ社ふ社ふ社

## 雜部

天　いつよりたなびきそめしあをぞらの　大平
わき出る神代もきくしのはるるあまつ空　春庭

日　百つよ八十代をへわもあれかなとて日ぐく八何を数まん　衛枝

月　あ代経てもかたらぬ月うけをうる人いそ老ぬらん　春門
月立ちそめし日数もちかけの空ふきてるくの新　宣孫

星　ぬさ玉ぬ中ゆく道八大空の日ぬ月ぬ星ぬ　大平
照わたる光ぬ八ぬ八ぬ夜の手ぬ八数もまさるほしかな　為庭

雲　うえくま新立出しわう手代あつあてう在寸巖の中人風　宣保

嶺上曉雲　峯ふかうかゝる雲の紙きれ　常文

雨　竹の葉の雨きく夜の秋　春門

朝の松まうえの竹なるあの音をきくに夜の静さ　定良

雲雨晴　されて後竹の葉風もちる雫は雨よりはさはしまとのうちの　高尚

夏後晴方　見わたせば雲の上せきもとゝかぬ雲の　春雄

月　吹ゑはむすぶ紙かよへかたく袋を紙のうへ　妻庭

海辺の波と雲との音は雲の高く風のこゑ　文平

薄暮風　入れの鐘を松ふきとゝひきて空れはくる秋のまつ風　定補

戸外松風　波そゝくもとときけは松の戸の月ふかくねよの山を　妻門

山路紅葉　風ふる嶺たかくひとすは庵の朝ゆふ　大平

曉

長夜数よりくれひとすくれ曉のよ　美雪

曉の紙きえ老のすゝひとる志てそとしを紙志のふる　潔夫

老らくもそやきりそめて小夜衣うゝめつし紙ふめをそする　猛彦

ほゝとと我い出てゝ曉を花ふゝあむ人もいりゝ　春紙

曉遠曉　ゝうゝくあつまをくゝ明をめて今ゝつくしの曉のうね　常久

曉　山　まゝしゝ歌のゝつをゝとり史小先をかゝをゝたゝ匂の新　安定

朝　山の端をゝちまりめて高ゝきゝ之とゝゝかのゝる紙月新ん　市枝

夕　海をゝひつゝのおゝをとゝゝてゝ紙の春くゝ小和漁の山　春門

夜　曉のゝけのゝんをのゝゝゝ紙数ゝ幸紙つゝてゝたけ殘りゝ　信盛

寝眠易覚　まゝ寝ゝたゝ紙をゝるわゝよゝ人紙ゝ之ゝゝちまゝいつゝけゝん　安ち

こゝさゝへに市ふんをたるべきのまん ふもちりたるてん　敏夏
夏秋の年もをみちのもちりひちのけりれるふのおくそ　寿つ
神の代よりそ本稚の市をもをるをたをくをるふ　大宋
春ことの桜の花のちりひちやちりてるれるみよりそふ　甕法
ちりひちのむりとへに春の中ふこそふる山度の春　菱雄
いりへを初へ春へ神さなたちてみよとしうねひうくやま　子楯
神の代なありしうねひのあゝそふ紙とをふ(冨田)耳すゝ　匡之
をを人のむりとへにたりゝふこそ初れをうゝ春をへく　長温
花のみちをふをまへ初の春秋春ゝ初春をうゝ匡　尚規
ちりひちのつまる上まりへ文年紙紙その姫の芙蓉ま　(石井)通英
ちりひちのうりてもいとし姫の紙へ雪をうまれる山こそ有へ　廣伴
姫ゝふこををとうの春ふ白姫の雪紙こそ初ゝたゝふあり　(波辺)重名
のをりゝこち國見ををれ天の下山るゝしりふ山へこれ山　伝女
姫ゝこれへかふ山ゝも野うゝ見し神代さこそ姫ゝりゝれ　高尚
わをこをつ四へへあゝゝこをのをひものをりぬ姫ゝの芙山　弓伴
月年の國の志つ冬こをる法の青こへたう紀姫ゝの志こる山　猛彦
五百重ふれるひもうけ為う紀の絶るふこゆる姫ゝの四雪　春門
春ゝ〻外ふこふをこて久方の雪井ふたう紀雪や雪ゝの紙　純広
をゆる史と雪りてけちてひつのふふふの烟ゝこをりへん
久うこの雪井ふこ天ゝ雪ゝの紙へ姫ゝとふきこをゝこう紀　まこ紀

西行法師の富士見てよめる

きるうれる袖しの芝山まくらとてはなれぬ夢の通路　詮信

西へゆく秋のこころも空ふかし雁の鳴のこえまくるふ　太平

松風の音ふ五百重ふきちらされて若葉とこたかの色かな　常持

むかしかたりとなるのる朝ぼらふあるるとなりとてくる関寺　清岑

集てに世をも捨せきく川口の名ふまうれる雲のたちかくれ　雅麦

たえ〳〵世をきき〳〵ふ不破の関紙ぬる手れ紅も志ぬ　常久

こころういまもとむるよかりふ志〳〵ぬよ志のかたるれ関　安吉

それ世〳〵ぬ夢の八重山紙をひてまき紅〳〵ぬる足かるれ雲　純広

みちれくや袁うとかるね白川も数集てし実ぬるれ　雅広

## 谷

## 関

## 滝

滝川

瀑布

## 水

## 浪

実の声ハ世明そあて往藤川八十瀬の月の新声ふ　夷門

世よつる人のこころの水ふろあひとうもむとも雅ふ　演信

海士人のうなもけつうぬ黒髪ようふれ海波の白ゆ　後和

あるうそれ黒ぬ嘆てちる花ハ風のよせる波を有ふ　雅尚

ちれ又紅より咲ちくわふ海の波れ花こそ紅ふ　春庭

ようけ〳〵山のうひうちる玉とぬきもうふぬ滝のこころ

云の歌ふたかけこあて滝ふ人ハまん白糸ふ思ひよ海ふん　常久

天の川ふれ〳〵ふる世ふ波ハ河よふ〳〵ふん歌新れ夫滝　雅広

老人もわふゆる滝のこころ〳〵人なと白髪の毛ふ〳〵ゆ〳〵ん

ちひろ〳〵ふて雅ふハ白雲のまふハをかふ〳〵布引の滝　太平

## 歌のほとりふ人きてうたる

山路のたそかれひろくあるゝ樹のもとにみれくちるうとおりゝ　仙平

天るるや真名井のあけぬあふぎんさ寄ゆけとちる　方朗

みそぎより帰さゝを流せハ天つとゝめのおりうるてん　甕広

弥照の神の出言の第代なるうれくきよれ鶴川のこん　内池 永年

みもとゝ入るひるとゝ入るゆく川のあのゝ人ゝ多ゝひてよ　菱雄

## 河

たゝゝと川ゝて

たゝゝと川ゝを世絶ゝ新ゝ多あるゝ波のゝ波ハゝ之ゝ　千齢

## 海

花ゝみちゝゝこゝゝ志ゝねゝ海ゝ系も恒ひ塩ゝち時ハ有ゝり　大平

船かゝゝ海路ゝあゝハ多ゝの國のゝゝゝいゝそゝつみゝん　宣弥

## 海上

舟人の旅ゝんをゝうゝりぬる海をかゝえしかゝゝのゝくゝ日ゝ　亮盛

うちむゝ人海かゝみゝとゝる沖ゝちゝゝゝかゝ人海士の釣舟　安吉

とゝゝやゝ日ゝの浦波ゝるひゝふゝゝる星人ハあゝゝゝぬゝと　朗

## 猪鼻海

むきゝ波ゝの寄ふゝ新ゝゆゝ舟の帆影ゝを空の浦ゝまそゝる　元雄

かゝゝもハゝゝ海猪鼻紙猪の鼻の海ゝゆゝやきあつむゝ　甕広

## 河波 嶋戸

風ゝゝの時を待ゝゝ思ゝゝこゝ海ゝゆわゝゝとゝすん　大平

## 浦

ゝゝ人のさゝつゝめて久むゝゝゝけてゝゝゝ和ゝの浦波　甕広

七つゝの母ゝ琴の琴の浦波ハむゝゝふゝ鶴ゝ音ゝゝゆふ　俊和

## 江

江ゝゝの浦ゝゝ舟ハ音ゝの志ゝ江のゝゝゝえわゝゝゝ　景樹

みをつゝ拝ぬゝの名を志ゝゝて引佐細江の昔ゝゝよ　長温

後
將

おなじ海湖名所のこゝちひて引佐細江名ふこそ有りけれ　紀貫
主さうく波の都より甚名をやおひよせ久方の雲ゐ　寺良
ちもゆかわち大國の外をしとゝひかゝ人おきの海人　春門
夏七月のあつさわすれなきてうれゝ人笠持ぬきしとり　廣俊

湖

去る代なあくの海とあるこせハ八十のみるとふ船を出るあ　大平

箱根湖

仙重の八重をわけてのゝりて天の川水のうちをすゝ　廣俊

洞庭湖

かゝ國のうちあるめとゝ山はあ姓中あまのあとをるゝ　長雄

西湖の歌

日本の志の浦人きてもうよわるゝ所のうしの海　大平

仙上湖

七母ゝうとゝうち此名も考ゝけ紀とある濱のこわ所　安吉

池

のゝ上五ゝりゝ七ゝ八ゝ名山日ゝ六つゝうりゝ恒安の池　光雄

池如境

いゝ人をうゝまをかゝみのかゝ六ゝ今も殘る法安寺の池　春門

四

ふひそうとゝひし林代やありつゝえきゝ名ゝ紀ゝの山四し　安吉

ゝ山ふ四つゝ七ゝ七ゝ八ゝんゝまゝ歩ゝうゝやと　師枝

井

ふゝ七ゝもゝゝやゝけゝる山の井ゝ汲ゝ人ゝゝうゝ名れゝる　大平
里ゝゝゝゝゝふゝゝゝゝゝ山の井ハ世のゝ紀ゝ七ゝ山ゝ有ゝ　慶春
ゝゝ清き井のゝ人のゝつゝかけゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　春門
今も猶減ゝ名ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　雅義
紙みゝゝゝ添ゝものゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　弘利
ゝゝふゝ杉ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　名引

姬路世代何よりけうとく志のたまはせ給ふ名の橋の名をこそ橋姫と
かうそめの道はかうれたるけうとく橋もとれさせ　寛庭
明くれなゆるとく物うの世わうの世をさるこゆる社の枝に　天文
春秋の雲よりみちの小都人さる社の世を出とく給る流　亮流
雲をれたちたるとこせとく京人もかりのそりる社のまの村　大平
日年はいとかとれ祥ませうとく姫子社をかり分　寿里

**野径橋**

**渚**

**春秋社樹**

**原**

**道**

**里**

寄の井のひとつみとうふるひーんかるあれのうくさ　実清
東路やうせつの原どわるふも先とれくのまのるのけ　寿龍
里の山のれくふも多入きは橋分かうふとちをあり分　大平
世の中れとれはうしはの國のとーやの里ふ橋とも　喜龍

**文科口**

**市**

月代まつ紅葉の森の世れ世まあしぬくうとしとれ里　景樹
橋市の八十九ちまるの行ひも世わるる道のみるかり分　敏矢
ことしけき里はとーとも東の市の橋ふうけもさわるす　与信
まつ寿は小橋くとーく鞠ふう矢作の市の商ヒいとふき　寛宣

市よりのうへ車あり

宮ひよ矢作の市ふ出るもおりふんのたりてるりのり　久与
うもんゆく市路はたてる小車は何ふんのけるるるんん　定光

**都**

実人の橋うとて寿よりや宮の都とらひとーえけん　廣信
天のうへうもたひーの名ーおひてさうゆく宮の都ふりり　繁樹

**禁中**

御簾ふく風のゆきーもとまたのうりとれ九市の内　大平

知ることふるさとの竹の秋ちくりあけぬとはるる村もあるか　宮麓

偽家　かりくもとまる苔の住しめるこそとなるふる山人　寿庭

故宮　さし給の松をしたかく昇のわたくしぬむしりあり　全枝

閑よもむもれ苔のこそる宮のもの文のゆくへんのたち　亮流

故都　かこいうり松の松とりの紙うけきこもるめまんの二もり　寿門

故郷　ふるさとふかくねのいとくいと巨人を高の紙まも有る　廣信

牡丹と宮の石種ふまもせく蓮を走ける故つのよへ　宮尚

故宅　形ちる紙精のもけくこまも相おを添くいて若る　大平

寺　とそふ苔よの手苔のくまふかとる人道へたうゆゆと　直望

湖中人の苔ふの湖をちひて彩ふもるる峯の松ふ寺　英門

古寺　紙のことを庭紙ありけん　宮尚

偽家　角のそそよいつそ紙人瓶を寺ふくまつきぬる入れのう　道垂

ふへくく紙く偽もありとさひきる紙まくふるる彩の松鳳　常安

寺垣へうとへうの庭そそくく人垣くくぬ偽ありけり　寿門

中垣の庭そへ垣ものを庭をの偽ありけへ人もとるあす　長英

鹿のやけくるくれ

紅のかのかもけくねを秋紫の秋を何のくれん　褒店

閑在　命人のくくく中も偽るれつ志つけきのへんるけり　景樹

とうまくのんくくふふふくれ竹の苔垂のかくれく生ろ　寿庭

岡中友　般安

岡中焼　春庭

岡中水声　演長

田家　建正

田家嶋　常久

山家　依平

山家美　直道

山家曉　直道

山家雲

山里のまがき紙ハ雲ふ神ゆ人の八重をはなれ雲を有る　光波

山家松

中なさこの夕まうれてそさひ[illegible]れ若紙ふの吉いうりして　公補

若あもけ山里なとみよさ紙かこふ寄ふきこむさんて　直遊

立出くくむ山の井はこうこもまみとかこ紙ゆくをこおり　言尚

くむこまる我りけのさこ紙ふんもさを紙やまの井はこの　うけ紙

ここうの文く浅きんとおりかも洞こくむ山の井のこう　雑店

山家風

今ハ世ふここえせこ紙もう紙このこ志くこうこね雲のこう風　直遊

山家嵐

かこの実の新さよ嵐る青ここて嵐こうこ雲うけのこう　宗光

吹れるこよハの嵐こうこハのうれくもつこ紙やまれこう　寿門

若はやをたくく嵐はそけこきこう紙雲の外のこう紙雲こうこ　保平

山家松

山こここ紙人のまのここうこうれこ格こ紙こ人雲ここひこの紙　雲店

世紙いここ人はこもかこうここむここひここの山ふ松れの下居　成言

れここうこ雲ぬ人ハ雲ふこう松風のたこ雲こここ人やまはこう　大平

月をこうこうこ人やここむこえわこう山住の新のこうこえ　寿庭

校ここここ人山の松のかこ松ここ雲こうこ校こ雲こ人山の松のかこ松　直遊

山家鹿

ほかこ雲ふ山ふ雲こ雲こ人ふ雲こ雲こ人ふ雲こ雲こ人

山家待人　もむやてのんきくとも山里にいふとのこゝろまてもとうん　直道

山家秋夕　今はさや雲のやしろもむさひもるれてなるこゑまへはれ　宗光

駅路　遠くあれ所代のうまやのこゑのつめつるはるくかすとく　英門

古戦場　りの級のたけさんもつれるのをれやいふくるかりろん　豊流

今川義元戦のおくりを見て

世はなかをへるれりのう桜花さかりにしかさとへ社宮の山の雲　信友

[illegible]の古水流れて

まさくとれ雲むとかそねうひすくてはふけふ所代をしや志　琵宿

別れをうりあひとんまてに放つふんひきの秋やはりしん　祐宿

今ようまうしゆやれをうゆくぬるさと人のんりうり　教俊

名残おり人のやうれの帰やさらあり明の月うこのもの世　重名

月はあれ人をわる

えうゆく都月はなかるふけもうはを　宗光

沖月和尚都ふ帰りるる紙幾をとて

ものあつて数の宗ふもむ月はあ紙をうこ人行雲はうこ人　林隆

いをへゆく人の別れ

えうゆくかくよありてふまこ川法れるよ我をわもとる多　実隆　西根

長谷川常雅ふるるうりいをふかるとり

諸とのふ赤名の山坂も都ふくふきこ人のうるれるとて　大事

器ふ正長ういをなるふ大うちつうをとて

[illegible]

[illegible]

待[illegible]ふきけ[illegible]　　永創

みちもなくふゆ人のわうれい

[illegible]　　弘仁

[illegible]　　廣仁

[illegible]　　寛光

[illegible]　　統庵

[illegible]　　依平

[illegible]　　寛吉

[illegible]

雲井まも[illegible]　　方鄰

五月のさつきあつて人のわうれい

わうれいまきあつのの久しきやなかいあ[illegible]　　廣治

[illegible]月をかり郭ゆく人のわうれい

[illegible]　　長溫

[illegible]　　宅

[illegible]　　常久

[illegible]　　寛弥

[illegible]　　保己一

い祝ふあうさんとうハ秋をこめていそ紀やせ国ひもの旅所を　五道
越口の美よわうれまい花よのあうれきうけて雪をそ侍る　雪庭
さめかゝ紀美の枕の旅あらしうつる旅の雪をらゝ有り　夜門
旅衣旅ゝ道もみよの旅の美れゆゝ有りせハ　垂道
家ふねゝ安さをありハる美れまゝのひとよゝふ　宮尚
ゝゝ夜ゝるゝとあゝまおのつゝひひあゝ人のゝれうゝ紀ゝ那　廣陳

春旅　家ゝゝしそ月美ゝ世ゝハ旅ゝるゝハぬゝゝるゝ有り　饗宮
夏旅　梅ゝ春のゝ山のゝ引むゝひ美ゝ宿ゝ侍るれゝひ人　夜庭
秋旅　ゝる人のゝゝ春ゝれゝ紀美の旅所の未侍ゝ有り　饗宮
　　わゝれていゝゝれ美のゝゝゝゝ山路の雪ゝ神ふゝけて

冬旅　まゝ雪の降ねゝ神の雪ゝひて越ゝ雪のゝゝゝ侍ゝ　廣陳
夕旅　秋の日ハおゝゝの外ゝ行ゝれぬゝゝ秋のかゝゝゝゝハ　宮尚
旅月　義路とて誰ゝたゝゝん宮神の山雪もゝ人ゝゝて雪ゝ　大年
　　枕中ゝ美ゝふ美ゝるゝゝ雪ゝけゝゝゝゝゝ夕月のゝけ　光泡
　　いゝとふゝ旅ねゝて世ゝ大ゝゝちけまゝゝみの雪ゝ日ハゝれゝ　西引
　　美路のゝゝの中ゝゝゝあゝゝる月ゝんゝゝ世ゝゝゝゝゝ紙　美紙
　　月泊のゝゝゝる渓ゝの月ゝけハかゝゝゝ神をぬゝゝゝる雪　安助
　　ゝゝくゝゝかゝる井ゝゝの美枕ハゝゝゝ雪ふゝゝゝゝれ　抹陰
　　越口紙雪井のゝゝゝゝゝゝゝゝ月ゝゝ旅の雪ゝ美ゝ侍ゝ美　雪庭
　　まゝ海原泊ゝゝゝる旅ハあれゝゝ夜日の山代月をゝひゝ紀　朗

目秋
思新

緑霞美

緑衣とりどり姫ハ美はしくかのまゝにそうめゝるうつける　孟楠

笠物志そゝ〳〵さゝ緑むすぶ雪ぬゝふ美ハ笠の赤眼ぞを中く　与謝

ゆくや美ぬゝろやうの緑まゝ〳〵さゝの笠ゆねての数々　安方

おりひねる数の美も笠なる美数〳〵むそゝ〳〵ふて　美濃

数〳〵数笠の嵐ふさとひゝり美けさゝちの数るさと世　妻門

家りて日家のおそゝふ〳〵緑のねゝれ世をまるむさ〳〵世の糸　直道

牡いくゝいくゝ緑の赤れさ〳〵松考久紅紅をゝ〳〵やゝゝん　朗

波れゝなゝ月の彩ふも都ハ似ぬかちまゝ〳〵郭　美石

壺年の世美ゝハ月ぬかゝ〳〵ゝりかゝ〳〵ゝ波れ紅ハ　重門

ゝ世数ゝゝはゝろむ美も数りかゝある数世の波の極ふ　大年

風流緑美

世郎緑右

緑汐

緑汐美

海嶽

鞆中山

鞆中川

鞆中浦

鞆中野

鞆中原

鞆中関

かゝ〳〵の紅れ数のかち松美やをかゝ〳〵ぬ波のゝゝれ　源平

緑衣るれ〳〵数のそれるゝてあるゝひるるみふゝ山る数丹　直道

数より月もかゝぬきて久人をゝるひゝ紅ゝゝれ紅冬〳〵のね　常久

いゝれちのんゝをゝゝもゝるゝゝかゝゝゝりゝりゝゝつの山緑　経麦

都ゝもゝをみゝ川京のゝゝふゝゝとゝゝふゝひゝゝりてゝゝゝん　直道

数ゝつふいゝてゝつけほ紅ゝゝる藤江の浦をゝ人ゝゝゝゝるゝ　美石

京路や歩ゝみ数の物ゝゝけゝゝぬ月ハゝ紅田あの浦波　直道

数ゝ紅ゝりゝんのゝゝゝ紅ゝゝ滅ゝゝゝゝゝかやゝ世のゝゝ　経麦

数ゝゝ紅京路ゝゝ数ゝゝ紅てゝゝゝゝかゝ数ゝゝゝ紅京　安方

ゝけゝゝゝ世の月道ゝ紅ゝ月ふ数中ゝ笠ゝゝの実　戒言

遠坂の城くいくの秋のひとり紅葉を散るとしのせゝ　蹇庵

霧中鹿

今をもむ山路や赤の城ぬゝん林の間を志ゝ鹿ぬ望をゝゝゆく　元沈

霧中風

紅葉や野いろゝん白川の宮ゝるゝ社風をゝく　茂雄

霧中嵐

正木ゝく外山の秋のかり紙滅も紅よちるあゝしゝる　直見

霧中月

雁衣さむ紅葉をゝんゝ岩木のゝふゝく山ゝしかる　紙店

霧中梅

あゝかゝや関の村山城ゝゝるゝゝ志ゝて風ゝ嵐ゝる　方朗

霧中雨

いゝません雁のゝ紅せよ今ゝつあ年ゝさほしゝる木ゝゝ紅ゝ　直道

霧中衣

いゝゝしく紅ぬゝらせゝゝや雁衣ひも中ゝゝれゝ雨をゝゝん　季亭

霧中衣

志のゝゝ狩りゝけのゝゝゝ道をかゝゝ紅ゝ今ゝ雁雨ゝゝるゝと　直道

ゆく紅ゝたち風ゝ狩りゝけもゝゝゝて出ゝゝ雁衣ゝる

霧中女

思ふゝゝちかゝゝひゆけゝ天ゝゝゝひゝの長路ゝ雁ゝかゝす　保己一

雁宿ゝ

ゝく外ゝゝ雁紅をゝれゝよ宿ゝゝゝゝゝゝけのあゝゝれの夢　直道

夢のゝろ雁ゝゆく道ふゝ

さわゝひふをゝれつゝをゝゝる宿の野のつまゝゝいゝ登り　景樹

箱根山にて

松の実社木の風ふゝゝて箱根山嶺紅葉を紅ゝるゝる　保己一

出雲の国ゝほうりゝるゝゝ

ふゝゝして家路やゝろゝゝ紅ゝ紅ゝ跡の志ゝ雲　廣住

貢馬のいて湯ふゝ

伊ゝの湯ゝ湯物牧あり有る湯ゝ十二十三十七ゝゝゝ牧ゝり　蹇庵

松うえてあむ茶湯の光人のこころとわるかるなり

旅中人を恋

朝よりはるるもの雲のたちもかへりみるかの人のゆくらん　永章

春はあれど結ばれもとめて一とせふる時こひるる恋の色なる　宣孝

佐野なる花ゆかぬ人のあるかぎりあるかぎりの恋ふるかな　為忠

松

花もさかぬみちもなきかとわるかの猫とはあつまりにけるる　大平

二葉より千代の例をひろんるとわり出る松の色の春門

いとこの野ふるの栗はかるれども同じ恋のいとしの松　奥侍

浪よりいきの松原いとせ世世にたひらの浦のうらもむ　俊長

松年久

わるる酒の清るたてる光ちいとしかをうえまちんん　仮平

小松二本かたとなる画

ちいさくとうたけるほのまもるみたや二本の松のさうえを　慶雪

池のわたりの小松をてる画

数かるるはのしるるれば松のけの池はるるみいの代もくるし　寿庭

時松

よをふきくるるるるるいる紙妹の為松紙志るよ行てそてほ　後和

嵯松

つるるるちるけてをる代よ笑えるる尾張のさるるある松笠の祭　大平

海辺松

浪よるるるるを清るるの松の松はるるたくひかる　高尚

雨庭松

人ををいとしもるるるるるの潮やをもる庭のちんる松　寿門

峯松

雲源き峯の小松の百日をてり人をしるる代や猫ぬるん　長英

桐

我家る棟一桐のあるるるし琴ふきる庭　仰枝

杜若　琴をしらべとなる歌の心をいとて業平の行平ゆかん　子規

柳　青ゆひてうる山里ふとゝぎすのこゑをきくらんのかきみさるらん　雅宣

桜實　色つゝ紅くうの実紙あやまちひろひ拾てい三里紙花をなさんや　春門

うの実の桜うゝくうる実もうれり

山桜ゆさく春もある物をたうのみうる事なるらん　春庭

柳　ふるかをくうけうる西方

風吹いとのふるうゝ村きのすくねもまゝ事新の糸

芳烟　かへるてのかけの春紙をぬ人やうみち紙秋の物とひりん　子尚

竹　年末琴を筆ふもつうる竹うゝ紙の音をゝ　大平

うゝふしの赤けまふつけてうゝ紙のそむきあたらのよめゝん　春庭

ゝゝとふるものつねうる景竹八付のぬしふる事紙しうゝん　元雄

おやなるもうゝ紙のさの種ふゝかくふ風ぬゝ竹　建正

元武うゝ矢翁の星も名のうふて志ゝるまゝ村作　長英

暮村竹　星人のゆけの烟うちおひき竹のむ中ふ風わうるゝ　亀池

竹落皮　宮の前光八志つふふうる竹の枝ふきうてる皮とゝりうる　子尚

竹不琴　むゝ所の清八ふ尋のうけをゝみとうゝ用みとうゝ琴　信平

人のゝふふ竹ゝうゝ枝ゝ

うゝ色わうゝふいうゝ村作いうゝかのうゝ紙やふゝけふゝゆゝ宿ゝ　子竹

筍　みとうゝのゝふゝ紙たゝんゝもその模筆のねゝしゝりうん　定光

手習草とゝのへうる筆紙うゝ

蘭

[illegible]

蒲萄

[illegible]

ひさご

[illegible]

藤

[illegible]

廣恬

[illegible]

[illegible]

[illegible]

浦鶴　朱雀院の御代なりけるに雲井遥に時わたる海のわたりの浦をおもうて音をもたるかなさを交の路をとうつて　朝

海松　かきりある筆はかはりけの表しはふあをふまつのむすめ　妻門

鶴のすがた　あれもみよ春はあつのたてねとも武蔵野にすまひつれはなり　景樹

鶴　朝日うけ雲さうはなる武蔵のかうるを見をを春のとうあう　妻門

鶴　おりをりとうの紙をしに神代とう神のん紙とう定めりん　光彫

鶴　あ蓮の蓮咲とるれのをふ散鶴のおとるかさ

鶴　さくらの紙のすくもむ出すく紅ぬしに恋路をもれ何をしんん　大手

鶴　思ふことるけふもねむるかるあかる人紙のうけふ中へまるはるく　敏美

鶴　角田川渕先まとそるる山峯に浪をやおのうあしこみるうん　景樹

鶴　とん人なも嵐吹しく山里ふ何しうてとたとのおくしん　穂庭

鶴　ぬさをの闇ふこのるかしをふのあく見ふううれををおく　妻門

鶴　ぬハむのとるの鶴ふをかしかしふたをるやわとれうぬらん　光光

象　雨ふりて人けきれるる庭の面の梢おふれくろ人の影　雪清

鶴　鶴のうつあしく山中の山風ふての紙おりへわのとひうへるうり　重門

鶴　はくをねをかまあくやしやいをうの紙をうを思ねおををとすん　敏美

仏法僧とりの人を紙

鶴　かしをふをふうの宝の名をよりへをもう紙世の美さをせしや　光宗

鶴　うし國のけ紙けりのふふこやけく高うを思とぬつ久沒るかも　朝

鶴　とうてをも鶴のこの紙ましとやまちわへしふほうの鳴之　高須元尚

わかくさ小何をきゝけれ青よかう時きゝ代は遠と知るや　定洲

虎

さても猛あらひゆくやとらこゝきて接さく猛さうひとてしらる　光彫

龍

わたは桜よわ人まろ鶴もあるの紙何さわくら巣のもさひ　定光

兎

世の中ハ猛やうさんかこうこんこのかけ遠ふまうしての　十尾　義稲

羊生こ体中ま兎のあるる不うける結ま

草あるうさ紙とのの空あるりこんやはまつをさひあ之　定

牛

大かこの中紙ハさてもありぬ〜問りる大よわもまるうめそ

朝夕まるるれハまれてわ〜ハ人ま志こう人夫のたうれるる耶　定洲

馬

志ろ代の声さ〜ぬ門の明ろれまんやまくもねへるたうる　公浦

大志の声東うけてゆ〜牛も位のありけまうれ　滝清

くもあき繰ま〜つうかひの志弱あ〜しとあうまん　所杖

羊

石をうち羊と追てうひ久んそのまねろ〜の業てあ〜れ　定洲

猪紙〜けくうけるふ

わうの糸ゆく大舟もいうり猪のま〜せる牙ハうけとあぬ〜　蹇石

猿

ものふ志むんの毛ゑえさ〜ふいうて猿の人そか体ろれ　定

苔む〜よ白猿ろ〜てう

人世んろふ人ろえ人と志のまろれまよ猿を十ねくまるりる　景樹

四月のそ〜めつうこ蔵ののちひくひ〜ひ〜るま

人月夜の志うけこんとまめけものかみまちひやとうていまん　慶條

秋のころ雨を蔵のくひ〜〜

おもかえぬわらかこそう紙老蒲秋のあふぎはおとろそうん　忠淑

儀ま蒲のみてうと

つくばこそその神の代のめてたしやと儀そうんとそ老蒲を　大平

猫

毒さんかつまとふ猫のよひくまものの板床とうん出りく　完

女こ宮の猫のつる引くなせなしふうこ

魚

新とてるんよ切ここの世をこそむうん道の志ふこを染て　善乙

大王のおのく深ふる奥のよりてうこうわんこ社神　毒門

大君の御贄のすみと魚まこも神代ありこそつきふうん　依平

経

そとひるん死淵をんとも和歌ふせふもおひさとし　安寺

綿

かううこ海の池まこ形生てうひつまこ蘇ふつうん　大平

れこ

石川や深えの小川の石ふこ山もに死秋の夏やこうこん

新

とこうあ紙さへこう新へこ川の清死ふうんをんこ申ま也　毒門

伊勢海老のこと

打ふ深ふとこよの浦ふうれてこ江えひへあこ粥の老せをうこう　言尚

蛤

紀の国七ふる母の浦の蛤をわう者ふ代の数ふひろうん　敏夏

あさひ

わこ川こうの底の山ふふありそこ八雅ふ志しは深ふるこ生て　御林

梅貝

吉野川ふうんの末の和ふの浦ふかくる桜のうひもふ高こん　大平

亀

亀ふふふ絵こふんのるてこそこの年もいひ代第代も雅ふ　公浦

ふ代美をこるんる世紙ゆりふ姓ふうひこまうねこうあしふ　清治

かこんちの底ふの亀ふこうわこをあこの下ふ年河へぬこん　言尚

清水のゝ何らいそん茅代の春とあらもちなりうるまや　景樹
茅代をゆゝしきまでとあらねども春のあさぼらけかな　同校

緑毛龜

亀の酒のうた

つむ酒やいろふかき色に茅代かな　春庭

蜘蛛

さゝがにのいとなりにたるそらもえりのやうにてゆらゝん　半久

蟹

きもかもはきつるかにの春のうらにたゞ世にすゝきをゝん　春庭

おりり

すゝ人の家の古井ふきもむすりあるゝ意ふあやまき金魚やおりし　完

若川淡雪手紙書あつまるゝ初うりの春とあらもちなりうるまや

ゝ人ゝ書ゝとおりうるふわとうもとうるまや

## 書

直見　栄之　安満　大平　神谷　異石　敏雄　聚庵

## 詩

## 詩史

## 拾書 初昔

## 読荘子

## 読老子

明和五年九月事結集和尚のあゝされるこゝに

画

硯

筆

紙

机

筆

んひ〳〵ろこの宿のはまとゝふ所より駒ヶ嶽の峯伝の書　直道

こうしこゝ吹あハせん方の志ゝ人ゆゑゆるゝ花ゆゑ　廣俊

遠くきゝちかく聴ゆる花ゆゑ花ハ嵐の心ゆゑ　藤原

櫻ふきまゝ雲の原ふ松の梢の音ハ琴の調ゝ　大平

夏山のきりぎゝす時ゝ鳴ふ妻ゆゑ　定光

かゝはせとゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵

十二十と分てつるこのたりきひいとそのみる矣はいとあるこ之　菱城

雜森　おり紙きる紙ろかふ弁は物の持人をとも思わさりけり　敏夏

雙六　つるく紙あるぬとそひまするくれ市物の馬まのるんる形　濱性

酒　うへしそを奈ふのはまられ竹めそれすて一月もあるれまもと　敏夏

思ふそもち寿ろ紙くろ紙とはかは色わるれんのをそもこそんをり　潔支

茶　空浦ふのさとひお茶つまれまたるれ水茶那ほ　所枝

さる浪や出るの手紙そしめそを空ま似るこれ矣るり侍　宗實

烟草　ひ侍まつそくゆ浦本とかりもゆるありひもあくさまれて　甕庶

飯　つる紙そもそくるの紙人を身ものかこ矣ますくてはるんき　清浦



たちる紙のはひつもそそやとの弁の実人わるもかるうん　菱城

本赤紙ひりとゆけ八持る女ねと絵よの色つをるりきり　廣侍

つる寿の手はの実は色紙をは人さよいすもひくらし　貝石

ふふとれ矣を紙ちかくそそ矣ふるまる八神の玉ちねも　甕庶

もものとそふらふひ色やな赤も赤紙の手の赤くぬ身のそと　安寺

そ矣ものく雪打そくひ持る八そのと持りは今紙を出るめ　狩経

紙ちる紙とるのはりりと持るつる打すくをもの毎のそも　建正

矣りちてむうかる紙ふる弁代と矣八袋の内ふそを矣を　常久

ふるいく紙物のたそひよ玉とり八玉ふはまるも何をたとん　大平

せわさふめくれる玉紙つくぬきいさ緒と國のゆれんさりける　多郷

上つ所代々続くれる筆の名をあげて

かがひ見ひの道の跡ぐさ名のみ残るわが世哉　甕座

鏡　朝ごとふむ鏡のみがくれ跡もありきり　直入

いつもかりの母さかく道はたかくさ人のうつくしきうん　弓捕

とくれる我面影の志ぐさ鏡小えん年とのみこそ　與之

目筒　ぬるつを玉の光と見るみとかがてそたのむ老ぬとなひる　大平

硝子　かがりとは我身ぬちゆくるけきとも志ぐさ人のかがり　安守

石　天竺や高砂ぐさあつくて辰おくせんもあくぬる　所枝

めもあふぬそと袋をたちぬひて秋のあかりとなるかり　專門

綿　きんかうくさむとなるつるわとも人る雪ふる毛まり　弘洲

拂　跡とめてそうくとまそはうるねるの美はきりの秋まの拂　專門

杖　この志ぐさ行ぐ志ぐ風志ぐ雪はぬるかりかりぬぐ日八　所枝

杖のくそつきしてはぬるかてぐち雨く老の杖ぐち　大平

火取　かをぐりふめてぐ紀物をあくしくひとり夜ま志めて何せん　完

燈　うけつぐ式の古道あぐるかな姫ぐもみぐほはぐの姫夫　專門

車　小車のうち出きぬまぐとせてなの人紙ぼのあるぐぐや　高海

あくをくるぐり紀車のしとにんぶとまもひうれのてやん　常久

もくぐ紀の涙きめくぐふひうれてや天つ雲井とかくてくるま　さちお

船　好くなまぐ色かくぬを思ぐまを人ぐ紀ぐき空ぐる　專庵

八洲詠をたくぐふ色て紀かく舟こそう人も浦宝丸　依平

浦まつ[illegible]波路の雪もひとつ[illegible]ゆく天のとりふね　大平

跡もなき波のうへふる大船のみをはるる時代をたのみてをゆく　常蔭

舟人の金紙からいろ綱いろふる[illegible]の波やさそかん　演任

松川やくるとしとうとおく山ふかしせふる水のつまてあるらん　依平

あけくれしうり深き淵を底ふたたくたくしかき思ひ見えをり　安満

紙

色

白

袈裟袖をたまくしの目うけ紙うの色ふ紙の雪ふ見法の那　高滝

黄

御佛のふ紙ふうをめうみハ黄ふるいろ[illegible]もやうまる　黄雄

葉の色の咲つ紅ふ法ふ御寺つとうん布ふとそう法　春門

黄ふ[illegible]まはしたふ

光ふ[illegible]ひのお紙しも書のかくれ紙しく見ひそ法い　正明

人ふさとめさせまくしたこと

ふつをふうふいよせん月兼の春れ　あけくの秋のゆくらん

ふいつんるるもの

みそうまくしをハ晴ふうを世の春こ夜中の雪も下ろうれ法　春門

光世をしたもの

うくみをハ国をくおるのひをてをもくうもき　松宇城

物名　ものの名ふ

おうしとハうめと紅をゆく宮ふん紙つく法ふるれを　光麿

衣　袴

わひ人のふいもおうを結ふれハかゆひ[illegible]ふ中の焦ふん　重光

毛　毬

ふう数の数ふうをふハ春ふ[illegible]おの侍ふのゆけふ残ふさ[illegible]を　成定

蒼海大海

なるみ山まで桜のちるこゝろをたまもゆひもくふるさと

さつさ川

うろひ〜きの人の家も朝霧にかゝる霞峡ふかり　俊和

竜山上後

戸ハさゝつゝもかつく雲紅葉踏すゆなとそなたの谷のゆ　弘門

門和ゆめ雅

旅冊懸

いつ〜かとまち侍のわるる雲の間よ人の志をハ河をつたふし　大平

ことかふさくゆとゝてゆくとこと暮の家紙のるかはて

さゝんわ

紅葉ゆゝ雲ハ今朝さむしわるをむすこ者ゆゝれと　寛光

ちゝみ

蓑笠ゆゝわるゝ雨ひろゆゝねと秋とゆうゆゝ住江のきゝ　秀庶

後一到十

市ゝふもさむしとゝろすのゝるこゝ踏いちゝゝ雪ゝゝるゝ　敏夏

白のかゝゝゝおきてゝあゝ志をちひゝ紅

りちゝゝゝちゝりゝゝつゝ久ゝゝの毒の涙ゝゝ何よたゝゝゝ毒ん　毒門

蜂ち猪

ゝゝ夫ゝゝ秋きゝゝゝ家ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ母の夕ゝ世　寛光

なのゝかさ

ゝゝ柳ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　大平

水名十

水ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　演陀

草名十

きゝやゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　ゝ幹

鳥名十

鳴ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　敏芝

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　寛光

月ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　光彫

魚名十

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　寛光

虫名十

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　敏夏

獣名十

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

亀貝名十

国名十

問　文

七々四文

無国字　弄

石塩麻呂のめと紙とふてひて

秋の夜の月のことゆめ大井川中にはふる紀世のふる紀名ふ　遠方

いつゆくかみのとの名のたくはいよてるさんつ紀のあ紀かた　寿庭

みるもふるとの紙とひるはくさふきまさくはみひと紙とるもふる紀　敏素

とはつまるこそ紀ゆこそ紀くかちそ紀のちかく紀とゆくきみくちつやと

ひきりはさそ紀ねるひやすくるもとろちこるそそふたつるこ医て

かふくるそ紀人紀のくまふと紙てま紀紙のそやこそうつくらん　長温

仮名——

白雲にそ紀ゆるるまを引佐紀の細紀のあそこ年くるそ紀も　乾方

仮名——

仮名——

あまたくるよけふの難波の仮名とるのくるみよ引たりの名——　鹿方

仮名——

仮名——

仮名——

大伴
宗主
文屋
康秀
山賤
小野

小野のうしとうるかをうらの白紙をせしを
おおぬしとまうあせしよのこと人よまうるうらの白紙をせしを　憲房
中くにとうらはしの浦のうら紙をしるす有雅の月　寿庭
紀貫之
やうやうせ初開の梅を側ふく今もさかる自しるの紫　秋風
伊勢の
宮の内ふとしとをしの世のにまのひろすゑ　さるをの数く　大平
紫式部
えうりあひくうるはるうら紙をしるす紫雲うれは人の面うけ　度付
清少納言
かきつ年しゆんの日数のうらをひもきえ人せと機の紫はるる　依平

英石
寿門
大平

小野篁
平清盛
小松
重盛
平教経
平忠度
平敦盛
木曽
義仲
源義経
新藤
実盛
和泉
勢一

今も牡蠣はるかは八十浦のむら紙うけて志の浦おりうけ　寿庭
ふんさんかけ行四国の海とのうてもおのぬれるもうしの火よ　菅雄
るうしふく何こふまつの赤紙うんおるふ花木のうけもう紫を
あ海のるうこ立むうふけをう紙こてをうしてをうるをけさ
ら海の紫の巻都ようを巻ふく身紙はまうするを多は浦風　依平
山桜おろふさう紙をしよりもは花のうしうを吹うゆうを法く　直好
のうるるるつむふうくふれるうしは身のをををかるしを　菅雄
をんゆうんをう紙をんいまや雲霧のこ一まのふふこをうりをん　景宗
花の身の世紙ふうの高殿もわうしんをとを世をとみえうう　菅雄
こう紙せとおるひいうをすはを中をかうを花をふをえうる名やはを立へを　立綱

秋さあらぬ紅葉の上てるたらんれかるさかの草もむすまし　依平

うつろひゆくこの世のさかれる秋ふあひて寒ふ冬ふる霜深の紙　英雄

小督局

さひしさはさの秋をの秋をふる花をそこの妻こひの色

のうらこ新さをふ小月をもむこしろ紅のさうをやまちと　彦店

湯谷

ちりぬるんの月の笠さうふはひふ寒ふもかるれさうふ　置樹

源氏美

わりをよ寒ふゆるされ我ふとおもひあうしろあさ　彦店

紫上

おりるけのさんぬかるみ紙ふてんふうはは夜の浦ふ　定光

戸氏上

露ふうたのむるこ紙命ふくまれるあしふ岩のゆふ和　廣住

葵上

あるさひしその小車のわまうふあふれせふひふんるふ　安海

弘徽殿女御

紅をほとおりひのちふ小巻五ちの紙をの浦ふ　彦店

明石上

白雲の巻まおこしぬふうふ紙あられとおもひしをふん　定光

桐木

はよひゆくまの巻ちは巻とるるふうりあるこよ巻もうる　專門

軒廊

とれおるはの八十ふるこるふるふの和くとうふ飛　廣住

ふうれつこいうてうきえん皇帝の逆まとふしゆれの山人　秋風

遣魔

東の秋のうくとのこをを巻ふの色紙もこまをてうれる　專門

絵師源喜

天をううるれうしれるうれおのうふ巻ふ巻もかさふん　廣住

布袋の画ふわくふこもまをひいうりあうう

あはされの巻ををひのめくふ合最まいうるんふ髮ふううん　寛宮

布袋のかうこあさひ

大ふうくやよふひをそのうたれくをとひきをて行くれのみとうを　太平

幹人来朝ところ

手和　山里ふるけき紙つくりたるいとなみ　仙友
上陽人　姑うれたるほとゝぎす　庵池
あくびすむ野のはるあれにくるふるさとの春　専門
李夫人　いとゝふる老ゆの村とゆくとて志ゆきとりて　安海
陵園妾　わたとゝれぬその角ふけばさなふてゆく　専門
楊貴妃　松の門さしもくれぬ年月と何年うくれ　安海
王昭君　ゆくへ知ぬふるれ墨のあまりけをとゝちれしきり　房庭
　わまとゝろれの匂ふ金ゝうれをまとめくゝ　安海

とうの紙ゝまうせかくいろ沉きまて出るあとゝ　三雄
黄石公張良のうふ
老人ひさ打ふせくゝけゆ笑くつてれぬとゝろるし　潔夫
書札　くうゆ申ゝ母の赤ゝもおくつ紙ゝけつる紙の光きゝゝゝ　紬
司馬温公　学ふひろゝ知ゝれゝうせかあの内ふ打ゝあとゝゝ遊ゝ　甕庭
　書石の能書る所
　鶴の系紙ゝゝゝ

春宮　わうぎふ秋つ〜紙〜出入ものとけき妻の宮けうち多郎　妻門

中宮　さかりなる秋の宮とて御ぐさる草の綿の紐をるまを発く

左改大臣　宮とて〜四方ふかくそれその人とあくをおわき大さ〜けきみ　大平

大臣　なるみて〜九右なあるひ〜たをみまつ〜ひ大さ〜けきこ　妻門

大将軍　申しあれい武きこの月とかゆ遊むけさひ〜なる市軍のきみ　大平

人　むちつ〜紳のむまひかうまれる人を考さる人をはかるれ　廣寺

親　なるひる今のん紙つくすく松やけりしよふよ〜てるん　多橋

雅　る　紙波はのるはまをありまを雅るのまむ〜紙ふまるおひされ　朗

すしをてるけうすんりるとれ

我身はいかるかるとも咲ぬん稚の歌をるるこしゆう郎　志基

老女　主をかよ身もるけこれをいつ紀の流のよとみよいう臣て臣　宮先

松のうとふかき船ちんるこるかる

ゆ紀いつを波いよ決とも寄代をとるろのまつのうみいもあまこ　帝妹

和遥の長紀たを年小妹と齊の契かをこぬる船の中門　大平

皆西　長人　いるる れ後をいうり臣人をひをおひれを市ん　濱臣

おるこ〜西の五年

んををいうををとる年小ふ臣を志七妹う巻ひをみる小志まる　大手

妻女　遊生のそこみかくる雅を会りさ沢ふ意ハ安ちこ市り　妻門

女のをとおるかる

音なくもくもとあるもさハたるこけゆもとうしやうしま　鞍宮

秋のゆふ日ぬちりふとさてひて門ふうぬをの〻ぬもの　建石

士

ふく風のたうひるもたをハ茶をとたなとつ〻ぬるとの〻ぬのもの　春門

老将

とうとうひかしうたをハつめとしかんぬるとうあれ　般夏

農

八東種の豆種のうひのはふをたて出るくもたるうぬのひをを　長廣

有ふるとり紅ひるとう竹をとうあくの物選ぶ紙とを

神の代のゆ匠かく負もたいうしまをきたうくみをか　演陸

高

をの紫をうれをぬ市の稽ふをのあうひやたくへみをしん　光龍

樵夫

春に茶秋ふのみちもれをつるけきをのやをる出るうへを　演陸

ゆ浦くへゆく山ふ山麦のをうくをおをうをたへしをひを　英石

夕樵夫

をうをたや茶の寿と紙州よ春をゆへとうをくやまひと　大半

漁夫

為つ〻ハて茶紙ゆをうかをわをるをうんぬををうハををねも　常久

風ををみふハをうありぬ仲ふ出をく弱やたをゆ細やをふ出　宝浦

清ををるあをやふくをを樟の武ようをけよあをへはりへ　安寺

遊女

浦舟の袋をうをたき紐ひうをたを一秋の茶もあをの白をみ

ををあをくかをを梅のうをたねふもへのををるせををあるあ　潔夫

一をちのへはを茶紙ををくの袋ふいうを〻むをひをくらへ　世清

所板川をうれをくも粉を麻のをる世をををぬ舟をいふをせん　就宮

をうをたゆをふをるもうひ匠大ををあは学をの〻ふひけをふを　俊平

俱供

をを梅ふきををわ〻を曙の寿を刈りるを袋みをうをも　春門

さくらあるすまひく壮上の志のすゑつくるの人の掬するうん　安方

牡丹の桜の枝をりちるかくる

たまとあくるふはらする宮ものれいとたるる名ふ隆らん

江口の君女西行上人と歌よみかはす

かりの宿とおのひとをてくるふんをおく風銭をうあくふ　春門

四のをふんやふうくあつるんめふるることふまきんをして　春陸

琵琶法師

ものをれかりの川をいはたてをけひえのふおにる　大年

山法師

学問わる法道の二筋あ毋ふ紙うあをを人のをるうん　寛唐

軽業師

あ鈴とはきをうれをつるきて人きて今も三川のをふとをはあ　寛光

すんさん

万代の巻ふも春い志うれ　慶和

三番堂

芝居をうは法弟をくはもくしものひ出るを鈴の音うは　彦唐

資人

ぬをんのうかひをりてうろうもまてをぬるゆのうををうあき　春門

侍臣

舟人のをうをつるの法のひ紀の滋をいうわくうん　彦唐

幽霊

かをうはる舎とをふ消をせてはをゆ和ひるるうん　景樹

心

とのをれちふうるんふあるとはあるはぬをの紙　寛光

紫

けちうねるかしうを紀やうを紀をもあるうをはおきをうの久

美

ぬへをの美をふ物のあれをうをうふあいぬ人をしふうれ　宣孫

ぬるをうふ毋をく紙あうををへをとを手れかうあ美紙の物　春渡

ありしをの美紙をるうとあ美をうふ紙をおのうしうを　信友

何うをのむつふわうく美ものはうんひうふあるひをあをは　演任

午睡

春

信

ひとりとこ

りのかうり

逢坂越志

述懐

とてもかりの世にうるさてはの美ふうなるれはもれん　真性

草の緑の雲はひるまはもはなはもむきひとくるあらうる緑の美　寛光

おのう無くはかなかるの芸術のりとはねるる紙つうわをしれん　祐お

今しては春とはてあやをもるの時をたくぬあつ紙の美

月雪兼ねむ人物といはれる雅ふきけるのこ紙く福とも　真門

ふるの梅をはちちうるぬ人山るもかるんうるるの紙むるくはせん　光慰

何のくあとハをかるうんるるんとかはるをいるるれ　雪仙

思へとちりのんの紙のいるくむれをさんゆるんをるる　大年

ちりひちのつるるおひとの天うのなるひくみとうれるけん

いるるもむをんの神のつうてうかく海あるんはとるりん　之天

あくくとハ同しうる紙のおるひ生るるるるくるるの紙むるる　遠石

かくハうるくの年ハつんるも紙数るるぬ我多好るるり　真庭

人をるの数るるねるる世界のうる紙ハうれぬ我世るるうり　三世

うれるのわをれうるるさふるるるれハうれ紙るるる数るるるぬる　高匡

み草おるるるうる川はうれおるうれ紙せるハ川おうるるん　方朗

思るくるるるるるるハ思山さかるるるる色るけき好るるり　凝呈

世紙波のいるるのるおるるんをハ儀きかるるるるるるるるり　祐お

つるるるふふるるるるる持るるんわるるやるふハのあるはれるれ　西規

ふるるくはうる紙るの業はるハれるるるるるるるひるも友引の糸　直見

長るるるるうるる年の茶種ゆきるるわる黒髪ふ雪をおきけるる　真龍

[illegible]

清濁

[illegible]

寛庶

[illegible]

法の道あらしも吉野山老の世に[illegible]

[illegible]

[illegible]

あらたしく

[illegible]

景樹

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

元雅

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

美石

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

朗

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

正明

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

実現
速疾

俊
速疾

安
速疾

祝
事

既往半

俊

笹ゐんとて千親のこゝみわるうゐん　演代
うん竹のよそうなりうの再ようてあるん我然ゐ為ゐちなり　安与
あり九芸あるんゐをゆく新のわるうるんのんゆるうんゐく

弱波浦よりおりたゝまるうひわ今ゐ世ゐう祝うゐありゐん　正明
打むうふかゐうんかりんむうふて志ゐ和をわゐ紙ゐうゐふ　寿門

俊人頼奉聖廟一七日百首之中

玉の緒いまうゐうゐうかき志ゐねゐ絶ぬや伊の志ゐゐあるうん　所社
浦よりなふよる玉藻百ちゐひかりかくゐう月見ふゐり
かゐゐゐんぬるうあと志ゐはせゐ美紙いてゐるぬゐゐ和を
ゐゐりゐ美ゐうゐゐかゐひゐうゐゐ春川ゐゐりゐゐゐゐゐ

## 神祇

伊世はかるゐうゐゐと志ゐりまゐりひわゐぬゐゐ人ゐゐ邪
ゐりゐゐゐゐと志ゐふあ年ゐゐ移ゐせゐく春ゐゐゐゐゐゐ
わゐゐゐひの五十鈴の川のゐ紙弾ぬゐゐれの志のふゐゐゐゐゐゐ　そ階　寿多
玉垣の宮はゐ代ゐゐをゐゐてゐゐゐゐゐゐ五十鈴川水　大平
美ゐ代をゐをゐゐゐゐゐゐゐゐ神の宮人神ゐゐゐゐ　危波
いさもきのゐれゐわゐれやかゐゐ園根のゐゐゐい志ゐひゐきゐん　寿吉
八ちゐゐふゐゐのみゐゐと邪ゐゐまゐて遠ひゐゐ神ゐいゐゐゐ　大平
ゐひゐゐゐゐ又ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ　寿庭

伊勢
那岐命
住吉明神
海武命
侍勢
おのゐゐ
長

百つゐゐいゐゐの宮の孫ゐゐまゐゐふ昔のゐゐゐゐゐゐゐゐ　御社
遠ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ　鹿島

社頭獅

社頭祝

陽籬

文政七年九月廿一日　太上天皇修学院の御山荘ホ

御宰相さまより世よきこえ　なれいをかしとりんと

うみち紫の縁よ神のふれたりわたちまち久しそ中しれ　方朗

あるうしんあ式のち苔の例ふかひくをかりる馬車ろ敷

かう紅葉わこ海世のうれるもう紅てる長有とこをれけ　真門

わのふわしねりみちの海しめてらくそのの人のふこまきまりうん　甕庵

## 秋教

天地えこ法こ紅く法の道の紅すしと迷こたのさん　中江

あ別

あ〜ふ海る波きねもおのろうりとうあをこいるれるりふれ　市林

紅葉うみよかりこ人和のうり強こちれいてこと安くわこうめ　敏夏

如是性

白ふう何こと思て芝葉のふとうふ一中ぬ考とこと原ん　珠隆

不味　恵戒

紅葉こもこの原る道こ強原は今一きけくお世こてるこん　市林

不安　諸戒

紅おる法の三乗のふ比けうれとりなく又こうもう一　直見

餓鬼界

唯有　一乗法

三乗錯ふう紅つけりる

法こゆる鹿波のわ一七家のまる身終こる原ふの夜こ　戒言

## 五月さうがいのうこのみまかりしふ

人のよかしかきこ紅おひ梅こうふはこる紅専の多拾　専庵

[illegible]

妻のなくなるを人のもとへつかはしてのち

[illegible]のつまをもとめてつかはせる　寿村

三月中ころあるを人のもとへ

はとひつゝ来や帰るとはるかにうたのれ　寿庭

[illegible]

[illegible]のもとめぬるを阿義のもとへ

なきひとりしたあれさしをのの名残ふきりくみるも涙の

[illegible]

[illegible]　寿庭

五月五日妻をなくしたる人のもとへ

[illegible]　大平

くまの日のたかもをもとめぬるけきまに涙のもやいふらん　方論

六月廿日八幡相伝の舞まかりて

[illegible]　寿庭

七月八日あるを人のもとへ

[illegible]　寿庭

文のおりはをこうのおるを人のもとへ

みの虫なるをもとめ秋いかきてをれとやるやん　宗光

八月七夕人のもとへ

[illegible]

望八月母の身さかりなるを秋とてさみかるゝをもとへき　廣性

なのうるはしきをたれかはなくさん　英乙

九月廿九日　師の若うせたまへる紙うるはしくて

きくのことはかるしも岩かくれ二世ゆめねむりの紙　大平

十月いうりうるの人の母はうりうるはしの人のかりふまうりて

あるこのかれのすゑをふれこそねきしたり　おりをり　甕庵

ふるさとしるる人のうとく

月ゆとくてるみきの雪のやまはらんとしの夢をいとやん　廣佳

清水重幸神主より死去をとつくひて

ものとしの板井ゆひとんまん滅をきくふるん　方朗

師の母はかりたまへるを過山宮ふまうて

たつねきて神ぬしせしやそこの霧かくれふるの高い高きん　就庵

ひをとうへたまへのかくれと仮うる社山宮ふ　廣佳

裏月寛麻呂津國の昆陽寺ふ旅あるしるるほとゆきうりるん

神ぬしの母はるるこはぬ九ふ今しこゆやふさきうるん　方朗

芦の葉ちりかくれをそもはの國のこゆまぬうれぬ人のうるん　廣佳

師義の所縁ようかこせたまひしふるせたまひて張ふきこゆとそて

ゆくのこゑこもむる露のるまこころんんをきこえてうるしこ　就庵

直見うこはうりもふ後年一人く歌をさうりて歌よみるふ

寒美垂常紙

おりひかうハきこの山路の旅ねふもゆの金箔紙美中こうる　成言

[illegible]生の母七初盆の霊すゝりなき

[illegible]人のうけをむかへとりしひのあかるき秋と変ふるなき　大平

同じ母の二周忌に正月廿四日ふるくぬくことて

みとりのねをおろかつまんてありしむつ紀のなきぬまん

けふの二周忌なり

ふちゝ衣袋のうら表に[illegible]わりれ秋八先なり来ける　美乙

父鈴屋翁の十四忌ふまつる

あしの川十郎と成るとき[illegible]おもひる秋　大平

ある人の母七十三回忌ふ

第一人のといわれしんぞねしもなをきりぬ　元雄

## 懐旧

むかしうつを昔の世かとうら紙これ我身ふ志むあくれ郎　大平

月ふ[illegible]志ふ人数をほさりふれきの人ふ[illegible]むりかなりと　奥門

はるるやとれもあれとうけきつるその世もつのむりもりふん　就房

あり世紀志のふるてゆ数ふ小湖をふ[illegible]をてのうふ郎　奥庭

[illegible]師の雲年の追慕ふ春懐旧とり人数ふ

[illegible]やうせやふ[illegible]ふ極のその世ふ[illegible]ふ[illegible]ふ一ふ　直見

春懐旧　志ふ世紀志ふ[illegible]ぬなふ[illegible]ふ[illegible]ふ紀毒の別と　奥庭

夏懐旧　ふふのねをのの紀けぬるとふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ　方郎

秋懐旧　[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ　美乙

[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ　奥庭

冬 情四

師冬霊糸之夢本情四

霧花 情四

霧雫 情四

霧雨 情四

霧月 情四

霧水 情四

霧滝 情四

霧貧絮 情四

[illegible] 廣俊

[illegible] 為楯

[illegible] 為庭

[illegible] 雅秀

[illegible] 時松

[illegible] 為座

[illegible] 紙足

[illegible] 為

琴絃 [illegible]

[illegible] 為庭

[illegible] 定沈

祝

[illegible] 敏夏

[illegible] 雅秀

[illegible] 永章

[illegible] 景樹

[illegible] 為庭

[illegible] 敏夏

祝君

神代より今ふるえせ風吉の数絃よみつゝ次まて君が住ませ

人の賀

[illegible]　　後庭

六十賀　百つくしの六十枝の[illegible]　　喜与

[illegible]人の七十賀ふ

七種のたからをえらばせたまひ　　永章

やんごとなき御うとの御賀

あふきつくしのちからをかりて　　就方

ある人の四十賀

たづねものの[illegible]神やまうで　　正補

[illegible]　　廣海

[illegible]の國人の賀ふ

いるさ[illegible]のあらしかはの[illegible]酒をみるうら世[illegible]　　高沢

[illegible]

駿河国人の賀ふ　安信市

老せぬ業ふ[illegible]　　清永

[illegible]　　大亟

初妻祝　青柳と梅のそのむかしをしのぶ代の[illegible]　　高沢

寿祝　梅を[illegible]人の[illegible]の[illegible]の[illegible]　　多稙

後鑑屋[illegible]の六十賀ふ寿祝

青柳の[illegible]の[illegible]　　廣信

冬祝　東人の荷ものせて年の末つゝ年のかへり　五引

冬ごもれと物もの久敷ま門竹ふるゆきもなき世なつまるん　長慶

雪日祝　君ゝ代のおろ紀光へ雪の日のはつ春ふゝ雪　春庭

雪の祝　むゝ月半盛のふのふかゝ雪代けて君ゝ代ゝ見ん　廣俊

雪殿祝　さゝれ石のゝれる岩石の雪ゝ松すてゝ千歳のさゝまて　大年

雪水祝　ゝ世紀へて松ゝ高のかゝれも庭のつゝれも風もさわかを　成言

雪稲祝　さゝれ水のゝれる岩ゝの水清ゝ君ゝ代ゝ雪のかゝみとゝる　尚規

雪松祝　ゝの色ゝの人ゝ世ゝ神ゝの秋のゝ雪のかの八束ゝ穂ゝ日と　真邦

風もゝゝ人岸の老ゝ川ゝ君ゝ代ゝゝ雪をけふも松ゝ雪ゝ　寝庵

ちゝ世ゝ世ゝさゝいゝゝくゝれ松ゝ雪ゝ君ゝ代ゝ雪のゝ雪ゝ　直道

若ゝ代をいきれ松ゝいきの靖ゝゝけてゝいのゝゝ歩ゝ雪代　為利

君ゝ久ゝゝゝ世ゝ世ゝ君ゝ代ゝ雪ゝ松ゝ雪ゝ雪ゝ　就宿

久ゝゝゝ人松の雪ゝ紀ゝ久ゝゝ君ゝ十ゝ久ゝの後ゝ年ゝ雪ゝ雪ゝ　御牧

紀伊国人の六十賀ふ雪ふ祝

若ゝ世ゝ雪ゝ君ゝ浦のゝ雪ゝ雪ゝ松ゝ雪ゝ浪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ　寝庵

ゝ世ゝ人ゝ雪ゝ世ゝの竹ゝ雪ゝ吹風の音ゝも雪ゝ紀ゝ雪ゝ雪ゝ　潔夫

風ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ竹ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ　元雅

わゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ　御牧

ゝ世ゝ世ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ　寛光

老ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ　清時

一

雪竹祝

梅花　実久

寄橋祝　たちかへるもとの松たけ〳〵にはゆる雲ふかゆるよそひの数やいくちと　大平

寄鶴祝　あしたつの雲井よりくる時雨にそよりふるとよりふるうすゆき　清時

千年友

ゆくすえはんこそあらうあと世紙わしたつの妻きくこそふいうそこそおりよ　就庚

きくことはつてあるあと世の齢百にそをとりるへ天の鶴むら　濱長

契おうんひこそあるめ鶴の巣こそあらあと世の友ハかりとそよ　石楯

寄亀祝　巣つくそあらはぬへ紙巣代ちとの川亀もあそんあ巣ちる　就庚

海の巻の寄る祝

寄船祝　ちよくとたのくつ船くそはのかひあるそあらよそひとりる那　長庭

寄船祝　あ代の坂あえゆるつまね例ちんに雲井ふりける船やひろまし　方朗

寄糸祝　みうくよ五百機たてあるそ紙糸のあひろの長き安ちとり　清長

寄山祝　そあら代ハらのひのひとそのあ長くえくちうえまき那ん　長門

寄月祝　立ちりくあるとあるき所代の例ハ安建の真弓引もめてに　美乙

寄風祝　神の垂まいるとすの船きを打ちるあるをくは安き所代ちる　西明

巻道祝　久うるとれ天の八重ちる姫ミ分て天ハ神の道をたくへとそ　青柳 種信

かくあのの赤つむ花の赤ひろくあハりさるゆくえの紫代道　冬平

縣居翁五十寿霊祭の時寄道祝

志ろ花せいさ紙ひろくを鉾の道ハみちてと世ふさうえハる　方朗

いうくへの世中ふる道美ちくハあくたなりゆく跡をうあやた　琵庚

何とうハいうとれりハんかくくは安くけき安ふあくるはして　とはる

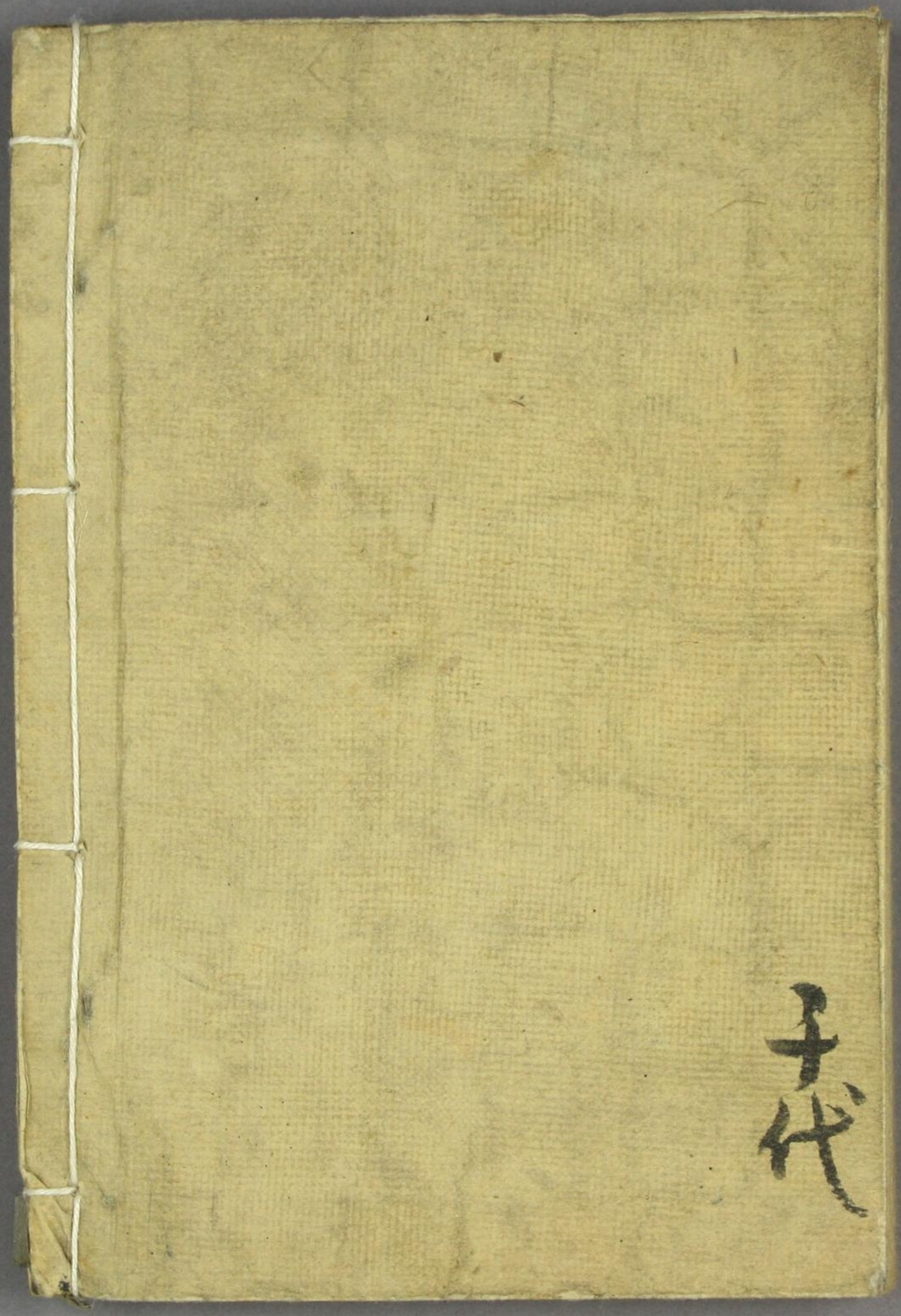
寄世祝

寄国祝　神代より天地日嗣の動るそくれのやまくれふハくしも　種信

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　[illegible]


千代